

門 新 遺 跡

谷地地区 II

——国道 116 号線和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書——

2005

新潟県和島村教育委員会

門 新 遺 跡

谷地地区II

—国道116号線和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2005

新潟県和島村教育委員会

序

和島村内を通る一般国道 116 号線和島バイパスは、平成 15 年 12 月に開通することになりました。旧国道は島崎集落内を通る狭小なものであり、昨今の交通量の増大に伴って深刻な交通渋滞や騒音といった環境悪化を招いておりました。今後、新潟市・柏崎市間の重要な生活道として、また新潟平野海岸側の主要道として、その役割はさらに増すことになるでしょう。

この建設工事に伴い、バイパス法線内に存在する合計 10 か所の遺跡発掘調査が昭和 63 年以来、10 年余りにかけて新潟県教育委員会・和島村教育委員会によって行なわれてきました。古代官衙関連遺跡の八幡林遺跡をはじめ、奈良崎遺跡・大武遺跡など縄文時代～中世にわたる多種多様かつ重要な遺跡が発見されたのです。今回報告する門新遺跡もこの内の一つです。この一連の遺跡はいずれも研究上欠かすことの出来ない貴重な成果を挙げるとともに私たち地域住民の貴重な文化遺産として受け継がれるべきものであります。

今回の調査では古代以前の旧河道が見つかりその周囲には古墳時代の水田跡が発見されました。河道内からは特に平安時代の遺物が大量に出土し、馬形といった祭祀具も見つかっていますことから、河辺での祭祀を行なったと思われます。また、平安時代 10 世紀前半の「延長六年」銘漆紙文書と旧河道を改変し船着場を備えた大型建物が見つかった平成 6 年度の調査地点にはほど近く、密接に関連をもっているものと思われます。

これらの調査成果が、地域の文化・歴史を学ぶ貴重な財産として末永く活用されることを願っております。最後に、本書作成に至りご理解ご協力を賜りました国土交通省長岡国道事務所・新潟県教育委員会ならびに地元住民の皆様に心から御礼申上げます。

平成 17 年 11 月

和島村教育委員会
教育長 羽鳥 仁一

例　言

- 本書は新潟県三島郡和島村大字上桐字谷地に所在する「門新遺跡」の発掘調査報告書である。調査は国道116号線和島バイパス建設に伴い、和島村が国土交通省長岡国道事務所から受託して実施した。
- 調査主体は和島村教育委員会（以下、村教委）であり、発掘調査は平成5年度に、整理作業は平成15～17年度に行なった。
- 調査に係る資料と出土遺物はすべて村教委が保管している。遺物の注記は「門」と調査区名、層位などを併記した。
- 発掘調査および整理作業体制は以下の通りである。

（発掘調査・平成5年度）

調査主体	和島村教育委員会	教育長	水澤文夫
事務局	和島村教育委員会	事務局長	矢部政夫
調査担当	新潟県教育庁文化行政課文化財専門員	桑原陽一	
調査指導	新潟県教育委員会 文化行政課		

（整理作業・平成15年度）

整理主体	和島村教育委員会	教育長	下村孝一
事務局	和島村教育委員会	事務局長	久住一雄
整理担当	和島村教育委員会	主事	丸山一昭

（整理作業・平成16～17年度）

整理主体	和島村教育委員会	教育長	羽鳥仁一
事務局	和島村教育委員会	事務局長	久住一雄
整理担当	和島村教育委員会	主事	丸山一昭

（整理作業員）

小田富美子 久住幸江 近藤保 関川たづ子 高橋智子 早川雅子 山口八千代

- 本書の記述・編集は平成5年度の調査記録・第2原図などを基に整理担当者が行なった。検出遺構の所見は当時の調査日誌を基に記述している。出土遺物に関する所見は整理担当者が行なっている。なお、1996年刊行『和島村史』資料編Iに掲載された遺物についても再掲載した。

- グリッド杭の打設は佛長潤が行なった。

- 本書における遺物番号はすべて通し番号となっている。

- 発掘調査については大字上桐集落をはじめ地元有志の協力を得て実施した。また、発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々にご教示を賜った。ここに厚く御礼を申上げる。（五十音順）

春日真実 金子拓男 北村亮 久我勇 坂井秀弥 高橋保 寺村光晴 本間信昭
松村恵司 国土交通省長岡国道事務所

目 次

序

例言

第1章 調査に至る経緯と経過 1

第2章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置	2
2. 地理的環境	2
3. 歴史的環境	
(1) 和島村周辺の遺跡	3
(2) 文献史料にみる和島村	6

第3章 発掘調査

1. 確認調査	7
2. 調査区・グリッドの設定	7
(1) 調査区の設定	7
(2) グリッドの設定	7

第4章 遺構

1. 概要	9
2. 層序	9
3. 調査の経過	10
4. 他年度の調査	10
5. 検出遺構	
(1) III区	11
(2) IV区	11

第5章 遺物

1. 概要	12
2. 遺物各説	
A III区出土遺物	
(1)炭化物集中区	12
(2)旧河道	
a 縄文時代の遺物	12
b 古墳時代前期の遺物	12
c 古墳時代後期の遺物	14
d 平安時代の遺物	14

B IV区出土遺物	
(1) 道路状遺構	17
(2) 水田跡	17

第5章まとめ

1. 古墳時代の水田について	18
2. 旧河道出土平安時代の遺物について	
(1) はじめに	19
(2) 士器の構成比率	19
(3) 食膳具の法量と形態	20
(4) 食膳具の観察	20
引用参考文献	25
遺物観察表	26

挿図・表目次

第1図 遺跡の位置	1	第8図 径高指數	22
第2図 周辺の遺跡	4	第9図 器種分類図	23
第3図 確認調査の実施箇所	8	第10図 遺跡別法量分布図	24
第4図 確認調査土層柱状図	8		
第5図 遺構配置図	9	第1表 バイバス関連の調査	1
第6図 器種分類図(1)	13	第2表 周辺の主要遺跡	6
第7図 器種分類図(2)	15	第3表 旧河道出土土器計測値集計表	8

図面・写真図版

図版1 調査位置図	図版19 III区旧河道出土遺物(10)
図版2 遺跡周辺の旧地形	図版20 III区旧河道出土遺物(11)
図版3 III区遺構平面図	図版21 III区旧河道出土遺物(12)
図版4 III区旧河道土層断面図	図版22 III区旧河道出土遺物(13)
図版5 III区旧河道遺物集中地出土位置図	図版23 III区旧河道出土遺物(14)
図版6 III区炭化物集中地出土位置図	図版24 門新遺跡周辺空中写真
図版7 IV区遺構平面図	図版25 門新遺跡III区・IV区
図版8 IV区土層断面図	図版26 門新遺跡II-IV区
図版9 III区炭化物集中地出土遺物	図版27 IV区SA8出土遺物
図版10 IV区SA8・6A、III区旧河道出土遺物	図版28 IV区6A・III区旧河道出土遺物
図版11 III区旧河道出土遺物(2)	図版29 III区旧河道出土遺物(2)
図版12 III区旧河道出土遺物(3)	図版30 III区旧河道出土遺物(3)
図版13 III区旧河道出土遺物(4)	図版31 III区旧河道出土遺物(4)
図版14 III区旧河道出土遺物(5)	図版32 III区旧河道出土遺物(5)
図版15 III区旧河道出土遺物(6)	図版33 III区旧河道出土遺物(6)
図版16 III区旧河道出土遺物(7)	図版34 III区旧河道出土遺物(7)
図版17 III区旧河道出土遺物(8)	図版35 III区旧河道出土遺物(8)
図版18 III区旧河道出土遺物(9)	図版36 III区旧河道出土遺物(9)

第1章 調査に至る経緯と経過

和島村内を通過する一般国道116号線は、新潟柏崎間の市町村を結び地方都市圏における通勤通学上の重要生活道であると共に、新潟平野海岸側を通じて東北・北陸方面へ物資を運ぶ主要道路として利用されている。しかし、和島村内では狭小な道路幅員・鉄道踏切の横断などの交通障害によって、交通渋滞・騒音・交通事故など沿線住民への悪影響が問題化していた。このような障害を取り除き、本来の国道としての機能を取り戻すためバイパスの建設事業が行われることになった。

これに伴い、バイパス法線内に存在する合計10か所の遺跡発掘調査が昭和63年以来、平成11年度まで新潟県教育委員会・和島村教育委員会によって行われてきた（第1図・第1表）。報告対象の門新遺跡は和島村大字上桐字谷地の水田地帯に所存する。遺跡周辺は昭和20年代に耕地整理が行なわれ、夥しい土器が出土したことが伝えられているが、遺跡の周知化には至らなかった。建設省北陸地方建設局事業である一般国道116号線和島バイパス建設に伴い、平成4年度に新潟県教育委員会によって確認調査が行なわれ、その存在が判明した。建設省・新潟県教育委員会・和島村教育委員会の3者による協議の結果、本発掘調査は和島村教育委員会で対応することになり、平成5年度に行われることになった。発掘調査委託契約は平成5年4月1日付けで締結された。



第1図 遺跡の位置

年度	遺跡名	調査面積	主な時代	特記事項	報告書
平成2	山田郷内	2,800m ² ×3層	古墳・中世	中世鍛冶工房跡・馬符木簡・人面墨書き石	未
八幡林A・B・B'地区	5,000m ²	奈良・平安	掘建柱建物・都符木簡・「沼重城」木簡	2005年刊行	
平成4	八幡林A・G地区	4,500m ²	奈良・平安	連房式堅穴建物（鍛冶工房）	2005年刊行
平成5	門新	12,000m ²	古墳・平安	古墳時代水田跡・平安時代旧河道	本書
平成10	妙満寺	2,000m ²	中世・近世	中世塚・炭焼窯・火薬土坑墓群	2003年刊行

第1表 バイパス関連の調査

第2章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (図版1・2)

門新遺跡は新潟県三島郡和島村大字上桐字谷地（通称「門新」）に所在する。和島村は新潟県の海岸部より約4km内陸に位置し、新潟県の海岸線上のほぼ中間地点となっている。東西に走る低丘陵地帯の間には、島崎川により形成された沖積地が広がっている。島崎川は大正11年（1922）の大河津分水路開通までは信濃川支流の西川に合流していたが、現在は二つの水系に分かれている。出雲崎町小木ノ城より発し和島村田、城之丘を経て日本海に注ぐ落水川と、高畠、日野浦の水系に小島谷川、荒巻川が合流した郷本川が寺泊町郷本をへて日本海に注いでいる。調査前は水田として利用されていて、昭和20年代の耕地整理、現在の圃場整備工事により大規模水田化が図られた。旧地形は現況からの復元は困難であるが、自然堤防や微高地が点在し畑地として利用されていたことが明治期の土地更正図から確認できる。

2. 地理的環境

和島村周辺の地形は西山丘陵に属する標高100m前後の東西2つの低丘陵地帯と、その間に広がる島崎川などの小河川により形成された沖積平野に大別される。島崎川の支流である荒巻川・小島谷川・梅田川は東側丘陵から流れしており、分水嶺から島崎川沖積地までの距離は西側丘陵よりも遠く複雑な沢を形成している。これとは対照的に西側丘陵の海岸側は海食によって斜面が削り取られ急峻な崖となっている。沖積平野は村付近から徐々に広がりはじめ、寺泊町下曾根付近で新潟平野へと連なって行く。

これらの地形は「新潟方向」と呼ばれる第三紀層および第四紀前期の地層にみられる褶曲軸により形成されたもので、新潟県中越地方から下越地方に分布する。この軸は南南西-北北東の方向性を持っており東西対称の地形分布をなすが、これは地層が横の圧力を受けたときに出来る「皺」の向きと言え、盛り上がりが部分が丘陵であり、沈み込んだ部分は谷を形成しやがて埋没して低湿地を形成する。

和島村周辺で確認される最も古い地層は西山層（西越層）で、次いで灰爪層、魚沼層・田沢層・沖積層が存在する〔藤田ほか1996〕。地質は、西山層は砂岩層と泥岩層の互層からなり、直径5mm前後の海綿の化石を含む。灰爪層は青灰色の塊状砂質シルト岩や砂岩からなり、貝殻や化石由来の石灰質砂岩（夏川石）を含む。魚沼層は砂層、シルト層、または互層を主としており固結度が低く崩れやすい。この層では貝化石のほかに植物化石・ケイソウ化石を含む。これは海中から浅海、内湾、そして渦へと変化した過程を示している。西山層は西側丘陵海岸側および東側丘陵東斜面（与板町側）で確認され、その内側に灰爪層、魚沼層が分布し丘陵地帯を構成している。また、田沢層は川の氾濫原として堆積した地層の浸食が進み台地状に残ったもので、丘陵から沖積地へ半島状に伸びる。地層は未固結のシルト層と中粒・粗粒の砂層で泥岩の礫層を含む。島崎川流域の水田地帯を中心に堆積する沖積層は、後期更新世末の約1万8千年前から現在に至る完新世に堆積したものである。腐植土、粘土、シルト、砂質土などの堆積物が洪水などで低い丘陵の谷を堰き止め、湿地を形成し現在の沖積平野を形成した。

こうした沖積平野形成の過程で、比較的地盤や水はけのよい自然堤防状の微高地は古来人々の生活上重要な位置を占めることになった。門新遺跡もこうした立地条件のもと営まれた遺跡である。

3. 歴史的環境

(1) 和島村周辺の遺跡

旧石器時代の遺跡 上桐神社裏遺跡、オクマンサマ遺跡のほか、八幡林遺跡では田沢層上部のローム質の黄褐色土から縦長削片の不定形石器が採集されている〔和島村教委 2005〕。

縄文時代の遺跡 大武遺跡、北野丸山遺跡、一本松遺跡、十二遺跡などで確認されている。中期以降の遺跡が多く、村内では珍しい火焔型土器や王冠型土器が北野丸山遺跡で出土した〔和島村教委 2003〕。

弥生時代の遺跡 中期後半または後期に出現する遺跡が多い。西側丘陵では後期では大武遺跡、奈良崎遺跡、姥ヶ入南遺跡が存在し、丘陵上に環濠を伴う居住城と墳墓を構築した。東側丘陵では中期後半以降の松ノ脇遺跡や、環濠の断面から後期後半の遺物が採集された赤坂遺跡群、上桐神社裏遺跡などが存在する。上桐に点在する遺跡群は高地性環濠集落およびその支群とみられる遺跡である。東側丘陵での調査例は僅かだが、同一丘陵に属する寺泊町屋舗塚遺跡では、縦約 4 m、横約 2 m、深さ約 1 m の墓坑をもつ墳墓が発見され、墓坑内には破碎された土器が供獻されていた。この儀礼形式は弥生時代後期の但馬、丹波地方特有のもので、日本海海上ルートでもたらされたとみられる〔八重樋 2004〕。

古墳時代の遺跡 前代から継続して展開する奈良崎遺跡では前期後半から中期初めころに 2 基の古墳が造営される。東側丘陵では寺泊町大久保古墳群〔寺村 1984〕、下小島谷古墳群〔駒見 1998〕が確認されている。大久保古墳群は前方後方墳 2 基、方墳 1 基、円墳 5 基で構成され、最大は前方後方墳の約 25 m である。下小島谷古墳群は前方後方墳 3 基で構成され、最大のもので全長約 17 m である。巻町山谷古墳や三条市山王山 4 号墳をはじめ新潟県下にみられる前期古墳に、形態・規模の面で類似した要素をもっている。門外割田地区〔和島村教委 1996〕・大武遺跡〔春日 1997〕では水田跡が確認された。古墳時代中期、後期の遺跡では奈良崎遺跡で 5 世紀後半から 6 世紀前半の須恵器、土師器が出土している。そのほか、下ノ西遺跡や北野丸山遺跡〔和島村教委 2003〕でも散発的に出土しているが、遺構を伴うものは見られない。

奈良・平安時代の遺跡 当該期の遺跡は島崎川流域の微高地、丘陵で確認されている。島崎川下流域の微高地上に立地する寺泊町横滝山庵寺は白鳳期の寺院跡として著名で在地豪族による造営が考えられる。村内では、越後國古志郡衙の成立期から終焉の過程を把握できるものとして八幡林遺跡、下ノ西遺跡、門新遺跡谷地地区が調査された。島崎川上流部に面した八幡林遺跡は丘陵平坦部を中心に四面庇付建物、掘建柱建物群が存在し、多量の墨書き土器、木簡が出土した〔和島村教委 1992 など〕。創建期の 8 世紀前半は国司第三等官の「掾」が関わる官衙、9 世紀前半は古志郡の長官である「大領」の館であった可能性が高い。小島谷川流域の下ノ西遺跡は 7 世紀後半において既に方向性をもった掘立柱建物を中心に構成されている〔和島村教委 1998 など〕。出土した木簡の内容から、郡衙に関連した遺跡とみられる。島崎川下流部に面した門新遺跡では、溝や柵で区画された外郭施設と船着場をもつ庇付建物群が検出された〔和島村教委 1995・1996〕。主屋の雨落溝から出土した漆紙文書にある「延長六年」(928) から、存続時期は 10 世紀第 2 四半期前後の短期間で、前 2 遺跡が終焉した直後に成立している。律令制の変質、郡衙の解体により勢力を伸ばした新たな支配者層、具体的には在地の有力者となった開発領主層の拠点施設と考えられる。これら官衙関連遺跡のほかに、海岸部、丘陵部には、製鉄、製塩、瓦窯、須恵器窯などの生産遺跡が点在している。

中世の遺跡 山城跡が多数確認されているほか、居館跡、鍛冶工房跡、製鉄関連遺構、木炭窯、水田、堀など多岐にわたる。ただ、集落遺跡は現在の集落と重複している可能性が高いこともあり具体的な内容は明らかではない。山田郷内遺跡では鍛冶工房跡や水田、井戸などが検出された〔戸根 1998〕。出土遺物は 13 ~ 15 世紀の国産・中国産陶磁器、呪符木簡、人面墨書き石等である。大武遺跡では水田祭祀に関連する銅製

No.	遺跡名	所在地	所属時期	種別
1	向屋敷	寺泊町大地向屋敷	平安	
2	弁財天窯跡	寺泊町大地小丸山・朴ノ木		須恵器窯跡？
3	夏戸窯跡	寺泊町年友中村		須恵器窯跡？
4	夏戸城跡	寺泊町夏戸川西	戦国	山城
5	諏訪田	寺泊町竹森諏訪田	平安	
6	京田	寺泊町竹森京田	平安	
7	太星敷	寺泊町敷ヶ曾根太星敷	奈良・平安	
8	横瀬山庵寺	寺泊町竹森横瀬山	飛鳥～平安	寺院跡
9	上向	寺泊町竹森上向	奈良・平安	
10	年友城跡	寺泊町年友		山城
11	小谷地剣	寺泊町五分一小谷地剣	平安	
12	五分一稻葉	寺泊町五分一稻葉	平安	
13	七ツ石	寺泊町郷本七ツ石	平安	製塙遺跡
14	土手上	寺泊町下桐土手上	古墳後期	集落跡
15	古星敷	寺泊町鶴口古星敷	弥生～古墳	
16	扇田	与板町岩方扇田	平安	製鉄遺跡
17	門新	和島村上桐谷地	平安	
18	八幡林	和島村両高・島崎	奈良・平安	郡衙関連
19	上新田	和島村上桐上新田	古墳・奈良・平安	
20	上桐神社裏	和島村上桐シテノ木	旧石器～室町	遺物散布地
21	北野丸山	和島村北野上田	繩文～平安	遺物包含地
22	下ノ西	和島村小島谷下ノ西	古墳・飛鳥～平安・中世	郡衙関連
23	旧北辰中学校	和島村小島谷下ノ西	奈良	瓦窯跡
24	奈良崎	和島村島崎奈良崎	繩文～近世	集落・墳墓・山城
25	大武	和島村島崎大武	繩文～中世	集落・水田
26	姥ヶ入	和島村島崎姥ヶ入		製鉄遺跡
27	姥ヶ入南	和島村島崎姥ヶ入南	弥生～古墳	集落跡・墳墓
28	立野	和島村島崎立野		製鉄遺跡
29	釜の沢	和島村島崎山田郷内		製鉄遺跡
30	坂谷	和島村両高坂谷	古墳・平安	遺物散布地
31	金山	和島村両高小田ヶ入		製鉄遺跡
32	オクマンサマ	和島村城之丘椿森	旧石器・飛鳥～平安	遺物散布地
33	中藏	和島村東保内中藏	平安	
34	山田郷内	和島村島崎山田郷内	古墳～室町	集落・水田
35	松ノ脇	和島村三瀬ヶ谷松ノ脇	弥生～古墳	遺物散布地
36	下小島谷古墳群	和島村小島谷下小島谷	古墳	古墳
37	中央	和島村島崎中央	弥生	遺物散布地
38	大平遺跡	和島村北野大平	弥生	遺物散布地
39	赤坂遺跡	和島村上桐赤坂	弥生	集落跡
40	大久保古墳群	寺泊町田輕井	古墳	古墳
41	屋舗塚	寺泊町入軒井屋舗	弥生	墳墓
42	妙満寺	和島村島崎小谷	中世・近世	塚・木炭窯・集落
43	十二	和島村小島谷上ノ西	繩文	遺物包含地
44	一本松遺跡	和島村若野浦東山	繩文	遺物包含地
45	村岡城跡	和島村村田祖師堂上ほか	中世(南北朝)	山城
46	落水館跡	和島村落水川内ヶ入	中世(南北朝)	館跡
47	高森城跡	和島村両高腰廻り	中世(南北朝)	山城
48	根小屋城跡	和島村根小屋神明	中世(室町～戦国)	山城

第2表 周辺の主要遺跡



第2図 周辺の遺跡

花瓶が出土した。妙満寺跡では14世紀代の木炭窓と周溝を伴う方形塚・円形塚、六道鉄を伴う小土坑墓群が検出された（和島村教委2003）。奈良崎遺跡で検出された溝や削平段、井戸、掘建柱建物などは「色部高長軍忠状案」に記載される「島崎城郭」の存在を裏付ける重要な遺構である（春日2002）。

近世の遺跡 妙満寺跡において近世陶磁器と柱穴群が検出されている（和島村教委2003）。また、丘陵斜面において検出された小土坑墓群の中には近世に属する一群も存在すると思われる。

（2）文献史料にみる和島村

和島村周辺は古代の重要な遺跡が多く存在する地域で、上桐の桐原石部神社、島崎の宇名具志神社は10世紀成立の『延喜式』記載の式内社に比定されている。また、八幡林遺跡A地区出土の第2号木簡に見える「沼垂城」は『日本書紀』に記載される「渟重柵」に比定されている。渟重柵は大化改新の詔が発布された翌年の大化三年（647）に対し蝦夷征討と大和政權領土拡大の拠点として設置された。さらに翌年には磐舟柵が設置され、領土は拡大していく。現在の佐渡を除く新潟県域に近い形となったのは和銅五年（712）、出羽国が分立し越後国の北限が定まった時である。この過程の中で七郡が置かれ、その内和島村周辺は古志郡に属し、現在の長岡市信濃川流域、旧三島郡域、柏崎市および刈羽郡域（後に分立）を有する広大なものであった。古志郡内には大家、栗家、文原、夜麻の4郷が10世紀にした成立『和名類聚抄』の記載にあり、I地区出土の墨書き土器「大家驛」はその存在を裏付けるものである。

鎌倉時代、和島村周辺に存在した荘園は白鳥庄（安元2年（1176）『八条院領目録』初見）、吉河庄（保延六年（1140）『大式尼奉書案』初見）である。建武三年（1336）『足利尊氏御判御教書案』には「吉河庄内吉田鮎塗」とあり現在の和島村吉田と考えられる。また、国衙領には乙面保があり現在の出雲崎町乙茂から和島村東保内にかけて存在していた。

南北朝時代には、「西古志郡島崎城郭」を守る南朝方の小木、風間、河内、池氏を北朝方の色部氏が攻め破ったとあり（建武三年（1336）『色部高長軍忠状案』）、これは奈良崎遺跡の山城遺構が從来から比定されている。村田の治歴寺には風間信濃守信昭の墓が祀られている。妙法寺は元亨三年（1323）、風間信濃守により横浜市名瀬から移転し建立された。開山は日蓮の弟子、日昭である。寺の背後には風間信濃守の弟、村岡三郎の居城である村岡城が存在し、風間氏との密接な関係が窺われる。

戦国・繩文時代では越後守護代長尾為景が守護上杉房能を葬り実権を握った。和島村では、長尾為景が祈禱料として寄進した「西古志郡内小津留水（和島村落水に比定）」（『新潟県史』資料編3中世1-84）、や長尾景虎が安堵した「西古志郡内山保（和島村高畠周辺を含む）」（同5中世3-3497）などが長尾氏やその家来の領地であったことが分かる。上杉景勝の時代になると執政直江兼続の直臣である与板衆として志駄氏や高森氏などの名が見られる（天正6年（1578）『上杉景勝感状』）。前者は寺泊町の夏戸城を本拠とし、後者は和島村両高（旧高森）地内に本拠があったとみられている。

近世には、江戸幕府によって検地帳が作成され現存しない当時の地名もみえる。その中には、当時盛んに行なわれた新田開拓によって新たに生まれた地名も含まれている。今回報告する門新遺跡の名称は、当時の上桐村、島崎村に隣接してあったという「九右衛門新田」に由来する。文政年間（19世紀初め）の「村明細帳」（小黒知也家文書）には、九右衛門新田（慶安二年・1649）→九右衛門新田村（同三年・1650）→門新村（寛文八年・1668）と名称の変遷が記載されている。また、「明暦2年（1656）九右衛門新田村御検地水帳」によると、上桐村30戸が作出し16町歩余の田地が開かれたが神社仏閣・屋敷等は存在しなかった。周辺は灌漑と治水が不十分な為、旱害と水害に悩まされる「悪地」であると記している。

第3章 発掘調査

1. 確認調査

建設省長岡国道工事事務所の依頼を受け、新潟県教育委員会は平成4年度にバイパス法線範囲内の確認調査を実施した(第3図)。確認調査はバックホウで表土を除去した後、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況を記録した。越後線線路西側に位置するバイパス法線センター杭No.220付近から西に向かって計26箇所で確認調査が実施された。このうち、確認トレーンチ1~3および6で遺物が採取されたことから調査対象地を設定した(第4図)。

確認トレーンチ土層説明

1 耕作土	6 青灰色粘土	11 茶色粘土	16 植物層
2 暗褐色土	7 黒灰色粘土	12 灰色粘土	17 暗灰色砂
3 褐色土	8 茶灰色粘土	13 茶灰色粘土(砂混)	18 地山
4 青灰色砂	9 青白色粘土	14 青灰色粗砂	
5 暗灰色粘土	10 灰色粘土	15 倒木	

土層を大別すると耕作土、褐色土、灰色系粘土、砂層、明青灰色土(地山)に分類が可能である。2Tでは黒灰色粘土・暗灰色砂層が厚く堆積しているが、これは古墳時代以降の旧河道の堆積土である。

2. 調査区・グリッドの設定 (第5図)

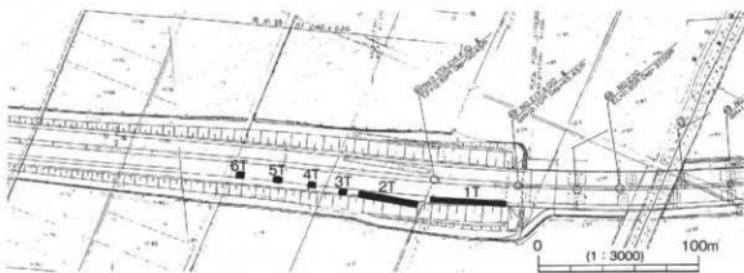
(1) 調査区の設定

本発掘調査対象範囲は遺物量の多い2T・3Tを中心に設定された。調査区の名称は遺跡の広がりを考慮して1Tの東側水路からセンター杭No.220付近の区間をI区としたが調査不要となった。1Tから6Tまでの区間については農道・水路によって区切られた範囲を東から西へそれぞれII区・III区・IV区とした。

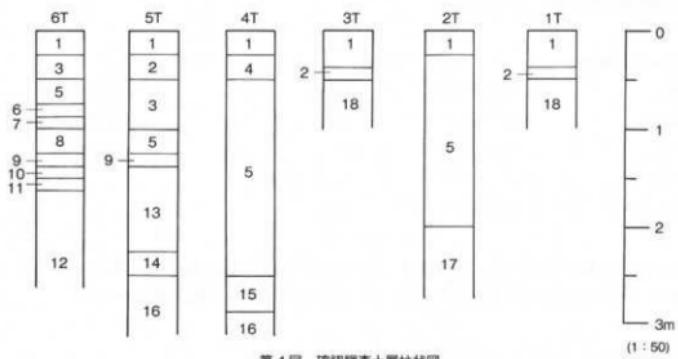
(2) グリッドの設定

測量用のグリッド杭はバイパス中心線を基準に任意に設定した。方眼は20mを大グリッドとした。各グリッドの名称は東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベットで示した。基準杭の打設は測量会社に委託した。センターラインを結ぶグリッド杭の座標値は以下のとおりである。

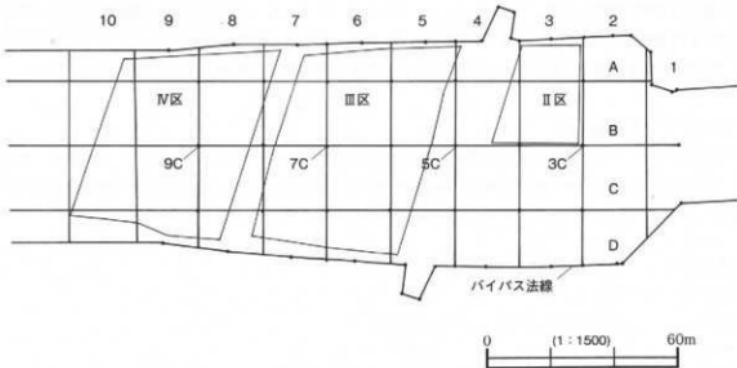
杭名称:	X座標:	Y座標:
3 C	176514.4342	25649.3534
5 C	176516.3221	25609.3979
7 C	176518.2101	25569.4425
9 C	176520.0980	25529.4871



第3図 確認調査の実施箇所



第4図 確認調査土層柱状図



第5図 グリッド杭打設位置

3. 調査の経過

平成5年4月1日付けで当時の建設省北陸地方建設局岡田工事事務所と委託契約を結んだ発掘調査は、4月26日から着手し10月7日に終了した。発掘調査面積は約12,000m²であった。

発掘調査日誌抄

5月20日 III区中央部に旧河道を検出する。5月25日 II区では遺物・遺構が検出されなかつた為、図面作成及び写真撮影を行い終了とする。5月27日～6月7日 III区旧河道より須恵器・土師器等がまとまって出土する。6月17日 III区旧河道で遺物が最下層（砂利層）より出土する。土師器壺・須恵器壺・長頸壺がまとまって出土した。IV区では畔群が見つかる。7月13日 III区旧河道の最深部より長頸壺・壺・斎串などが出土する。7月22日 III区の測量（セクション・平面図）を行なう。7月23日～26日 IV区畔状遺構の精査を行なう。8月11日 IV区の遺構平面図作成用の基準杭を設ける。9月13日 III区旧河道を掘り下げる。表土下3.5m前後に砂利層が重層で堆積し、底よりまとまって土器が出土する。9月17日 旧河道最下層（砂利層）から古墳期の土師器が出土する。9月20日 III区旧河道の掘り下げを終了した。9月22日 III区西側の遺構確認。河道部の遺物取り上げを行なう。9月28日 III区の写真撮影を行なう。10月1日 IV区中央の道路状遺構の盛土をはずし、遺物を取り上げる。10月4日 III区南壁の写真撮影を行なう。10月5日 撤収作業・重機による埋め戻しを行い、発掘調査を終了した。

4. 他年度の調査

これまでに門新遺跡では3度にわたり発掘調査が行なわれている。ここでは、他年度の調査歴をあげ全体の概略を記しておく。

1994年度調査 谷地地区（和島村教委1995）

県営圃場整備事業により発掘。11棟の掘立柱建物が検出。年代は10世紀代で3時期の変遷が見られる。10世紀第1四半期後半～第2四半期前半頃が最盛期で、明確な外郭施設を持ち大型の主屋と多くの付属建物が整然と配置されていた。主屋の雨落溝からは延長6年（928）銘の漆紙文書が出土した。本書で報告する旧河道のつながりが検出され、川岸を整備した船着場が検出されている。

1995年度調査 外割田地区（和島村教委1996）

県営圃場整備事業により発掘。昭和20年代に行なわれた圃場整備で大きく削平されており、水田耕作土直下が平安時代の遺物が出土した。平安時代のものとしては大型の掘建柱が平安時代中期の柱穴・土坑・古墳時代前期の水田を検出。大型の掘建柱跡群が中央のII区で検出された。平安時代の遺物は10世紀第1四半期を中心とする。10世紀第1四半期を中心とする遺物としては土師器・須恵器無台椀があるほか黒色処理土器も見られる。大型の掘立柱建物が検出された。

第4章 遺構

1. 概要

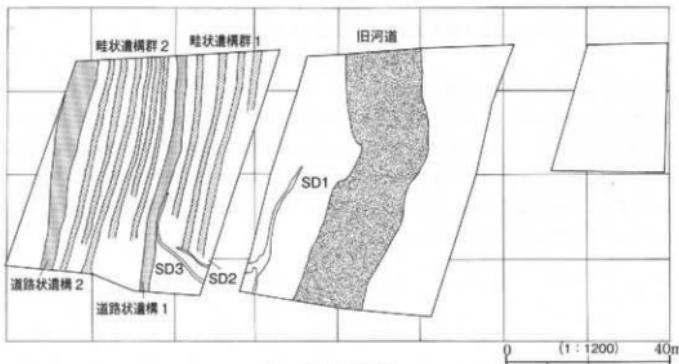
門新遺跡では主要な遺構としてⅢ区で旧河道とⅣ区で水田跡が検出された（第6図）。旧河道の上層では炭化物集中域から、古墳時代後期の土器片がまとまりをもち出土した。Ⅳ区は南北に走る畔状遺構が検出されたことから、水田域であったとみられる。畔状遺構群の中にはほかのものに比べ幅が広い道路状遺構が2本検出された。出土遺物量は旧河道がもっとも多く縄文時代、古墳時代（前期・後期）、平安時代の順に多い。Ⅳ区の水田域では古墳時代後期頃の遺物が出土した。

2. 層序

調査時の土層観察から、基本層序は大きく6層に分類される。遺構確認面はVII層である。IV区ではⅡ・Ⅲ層は検出されていない。

基本層序説明

- I層 灰褐色土層（耕作土）
- II層 暗灰褐色土層 しまり有 粘性弱 植物遺体を多量に含む
- III層 灰褐色土層 しまり有 粘性弱 植物遺体を多量に含む
- IV層 灰白色粘質土層 しまり有 粘性有 植物遺体を少量含む
- V層 暗褐色粘質土層 しまり有 粘性強
- VI層 青緑灰色粘質土層 しまり有 粘性強
- VII層 明青灰色粘質土層 しまり有 粘性有



第6図 遺跡配置図

3. 検出遺構

(1) III区 (図版3~6)

炭化物集中域

III区西側旧河道の岸辺に近い場所で、III層上面から炭化物の集中域が検出された。旧河道の覆土あるいは2次堆積層などとも考えられる。集中域周辺からまとまって出土した土器片は古墳時代後期の壺が多い。旧河道にも同時代の遺物は定量見られる。

旧河道

検出された旧河道は幅約20m深さ約4mの規模で南北方向に伸びている。現在の郷本川や旧地形図(図版2)に見える門新川と同様に南から北へ向かって流れていたと考えられる。覆土は粘土・砂・砂利の互層である。本遺跡出土遺物の大半が旧河道からの出土であった。最下層には古墳時代の遺物が、地表下約3mの地点に平安時代を中心とした多量の遺物が出土した。これらの遺物の中には馬形等の木製祭祀具とともに、遺存率の高い土器が概ね3つのブロックをなし集中して発見された(図版5)。このことから、何らかの祭祀が行なわれた後に廃棄された可能性が高い。旧河道の存続時期は、古墳時代前期には確実に存在しており、17世紀江戸時代の地方文書には本遺構のような河の記載は無く、埋没が進行したと推測される。

溝状遺構 (SD1)

旧河道西側から道路状遺構1東側にかけて3条の溝が検出されている。いずれも浅い掘り込みで、遺物は出土していない。SD1は旧河道と平行に位置し、途中枝分かれしSD2またはSD3に接続すると思われる。SD3は道路状遺構1の脇に接することから水田に関わる水路の可能性が高い。

(2) IV区 (図版7・8)

畔状遺構 (SA 4~7・9~14)

旧河道に平行して南北方向に畔状の高まりが10条検出された。ここでは、道路状遺構によって区分けしそれぞれ東から畔状遺構群1、畔状遺構群2の2群に分けて把握した。畔は幅0.5~1.0m、高さ0.2m程の僅かな高まりで、所々に盛土が認められる。これに直行する畔は確認されなかった。田面とみられる平坦面は13面検出され、幅2~3mで、一面に踏み込んだような踏み跡が認められる。遺物の出土量は多くないが、田面中から古墳時代の壺(23)が出土している。

道路状遺構 (SA 8・15)

幅2~3m、高さ0.4m程の盛土が施され畔に比べ一回り大きく、道路状遺構と考えられる2本の遺構が検出された。東側のものから道路状遺構1、2とした。6本の畔状遺構を挟んで約20m間隔で作られており、畔を兼ねた作業用の通路としての用途のほかに、区画単位の把握にも役立てられたようである。遺物は盛土内から古墳時代の土師器片が出土している。

第5章 遺物

1. 概要

今回の調査で出土した遺物はコンテナで約40箱であった。III区では上層で古墳時代後期の土器、下層の旧河道では縄文・古墳・平安時代の遺物を出土した。遺物の種類としては、縄文時代後期の台付鉢、深鉢・古墳時代の高坏・瓢、平安時代の須恵器の無台坏・灰釉陶器（小片の為未図化）・大甕・長颈甕、土師器の長甕・無台甕・無台坏・馬形・丸木弓などの木製品がある。IV区の水田跡からは古墳時代中期～後期の土師器が僅かに出土している。

2. 遺物各説

A III区出土遺物

(1) 炭化物集中区

甕 1・2・10・11は長脚で口縁部が大きく上方に開きながら伸びる甕である。胴部には縱方向のハケメ、口縁部にはヨコナデが施され端部は丸い。長めの胴部と平底を有する。12は「く」の字形口縁の甕で胴部中位が張り出し、平底の底部を有するもので、やや長脚である。4・5はやや長めの口縁部で口径は15cm程度である。胴部はあまり張らずに長脚になると推測される。

瓢 13は頭部で緩く湾曲し短めの口縁部を有するものである。底部末端は一部のみ残存し、遺存状況が不良であり、磨耗しているが破断面は見られない。このため瓢として分類した。

坏 ップ形の坏で底部は平底、口縁部端部は内湾して円く尖る(7)。81も同類である。

高坏 6の坏部は口縁が外反し中位に明瞭な稜線をもつ。内面黒色処理の高坏である。脚部は太く端部が短く屈曲して聞く。

鉢 8は内面黒色処理の鉢で、丸底の底部から口縁部が上方に立ち上がり、端部は丸く尖る。

(2) 旧河道

a. 縄文時代の遺物

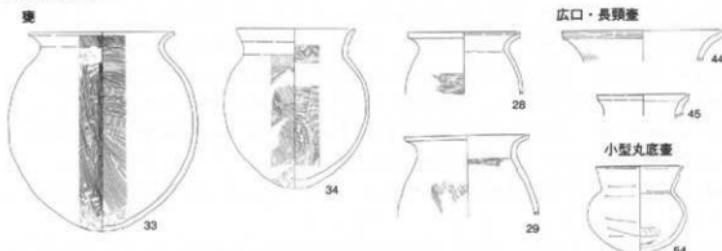
台付鉢 24は脚部を欠損する台付の鉢である。体部外面にLRの縄文を施し、僅かに内湾する口縁部に合計7単位以上の産みをつくっている。縄文時代後期に所属するものである。

深鉢 深鉢の底部(25)が出土している。

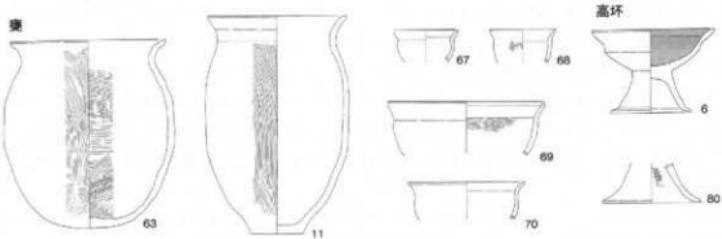
b. 古墳時代前期の遺物

甕 26～33は口縁端部を面取りするもので、端部を摘み上げるものもある。33は「く」の字口縁に胴部が強く張り出しており、底部は尖底で自立できない。ハケメ調整は外面で縦、内面では横～斜めとなっている。34は口縁部が上方に開き、底部はケズリ調整で尖底状になる。35～39は同様に「く」の字口縁で、端部が丸く尖り気味のものである。40・43は口縁端部に面を取るがヨコナデによる調整が行なわれず、ハケメもしくは不規則なナデなどで粗雑な調整となる。

[古墳時代前期]



[古墳時代後期]



第7図 器種分類図(1)

器台 46 の受部は漏斗状に開き、脚部はやや内湾気味である。受部の端部は摘み上げて面を持ち、内面の外周に櫛描きの波状文を施す。脚部には2個1対の刺突文があるが、透孔を意識したものと考えられる。このような特徴をもつ器台の類例は見当たらないが、器形からみて前期前半頃の可能性が高い。

結合器台 47 は逆「ハ」の字に長く伸びた口縁部をもち、北陸地方で特徴的な幾何学形の透孔は存在しない。脚部には1cm弱の円形の透孔がある。器台部分の形態から見て前期前半と考えられる。

高坏 48 は口縁部が長く伸びて外に開くもので内外面にハケメが残る。49 は脚部で柱状に伸びた脚部とラバ状に開いた裾部を持つ。丁寧なミガキ調整が整然と施されている。

長颈・広口壺 弥生時代の系譜をもつものが2点出土している(44・45)。外反する口縁部の端部をつまみ出し突出させている。

小型丸底壺 3点出土している。54 は広口の直線的に伸びた口縁部と体部が強く張ったものである。外面全体と口縁部内面にミガキが施されている。55・56 はやや内湾する口縁部を持ったもので胴部は球形を呈する。56 は胴部にハケメが残り、やや粗雑な印象を受ける。所属時期は前期末～中期にかかるものと推測する。

有孔鉢 50 は完形のもので、胴部を外面ハケメ、内面を板状の工具でナデ調整を行っている。口縁部はヨコナデである。

鉢 51・52 は内湾する体部と直線的に開く口縁部がつく鉢で、内外面にミガキ・赤彩を施す。

c. 古墳時代後期の遺物

壺 57 は内外面ハケメで口縁端部が玉縁状を呈している。59 は内外面にハケメではなくササラ状工具による調整痕が残る。60・61 は口縁端部が円く尖り気味となり、ヨコナデされる。体部はハケメ調整である。64 も同様の調整であるが上方に長く伸びる。72 は短く上に開くもので、口径24.2cm を測り比較的大型である。71 は口径29cm、胴部径32.5cm、高さ約37cm を測る大型の壺である。口縁部が短く「く」の字に屈曲して開き、胴部は長胴形を呈する。底部は丸底気味の平底になると推定される。63 は口縁部が「コ」の字に曲がり、底部は丸底気味の平底である。胴部は強く張らない。外面には縱のハケメ、内面には横のハケメが施される。

広口壺 底部が残存しない為、全形は不明である。鉢形といつてもよいかも知れない器形である。67・68 は口径8cm 程度の小型品である。短く屈曲した口縁部を持つ広口壺で胴部は短く低いものと推測される。これより大型の69・70 も同様の形態であろう。

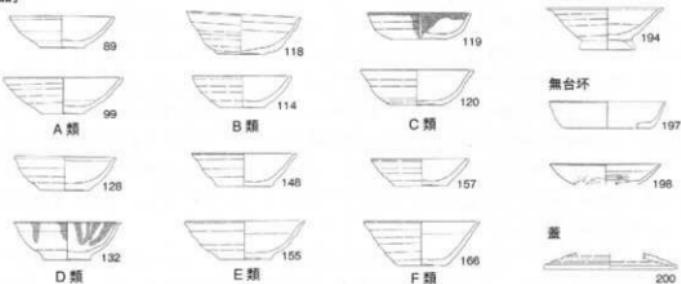
坏 73・77・78 は口縁部が長く伸びて外反するもので、内面黒色処理・非処理の両者がある。75 は口縁部が外側に屈曲するもので、内面は黒色処理を行なっている。口径21.0cm を測り大型の法量である。76 は口縁部内側に内傾する面をもつ。内面は黒色処理を行なっている。79 は内湾する体部に内側に屈曲する短い口縁部を持つ。内面は黒色処理を行なっている。須恵器坏Hの身を模倣したものと推測される。81 は深型の坏として分類した。炭化物集中区出土の7 と同様の形態で、口縁端部が内傾する。底部は平底で全体の器形はコップ形となる。

d. 平安時代の遺物

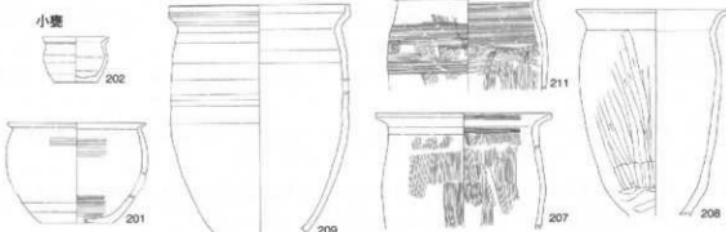
土師器

無台壺 内外面ロクロナデ・底部を回転糸切り後無調整とするもので大半を占める。個体数が多く形態は多種多様であり、すべてを区別することは不可能であるが、概ねの傾向として6種に分類した。以下の基準は

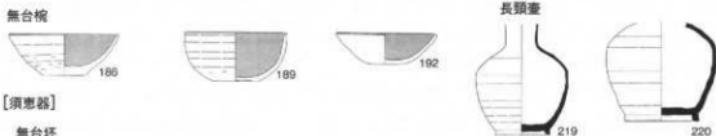
[土器器]



長甕



[黑色土器]



[須恵器]

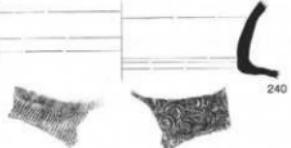


有台坏

有台椀



大甕



第8図 器種分類図(2)

形態的特徴による分類のほか法量なども考慮して行った。全体の傾向として、口径は12cm前後のものが多いが、14cm以上のものも僅かながら見受けられる。なお、法量については〔渡邊朋和2001〕を参考に口径・器高・底径の相間を径高指數（器高／口径×100）、底径指數（器高／底径×100）で表示した。

A類 脊部は椀形で緩く湾曲し、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの（82～102）。底部は口径に比べ小さめで、4～5cm前後が主流となる。径高指數は27～35、底径指數は35～40前後に分布する。

B類 A類同様に脣部中位で僅かに湾曲し口縁部が内湾する（103～118）。底部はA類に比べ大きめで、5～6cm前後が主流である。径高指數は25～35、底径指數40～47前後に分布する。

C類 身の浅いもので大き目の底部から屈曲しそのまま立ち上がるもの（119～122）。径高指數は30以下が主流のようである。

D類 脣部中～下位で椀形に湾曲し口縁端部で外反するもの（123～135）。径高指數は29～35で身の浅いものは見られない。径高指數35付近のものには底部が厚く平高台状のせり出しがみられるものがある（132～134）。底径指數は40代が殆どである。

E類 D類同様に椀形に湾曲し口縁部は強めに外反する（136～156）。底部は大きめで底径指數は40～55前後となる。径高指數は27～33の範囲に分布する。

F類 底部から口縁部にかけて直線的に伸びるもの（157～166）。径高指數33以上の深身のものが半数を占める。

無台杯 197は須恵器無台杯の形態に類似したもので、198は内面にミガキ、底部外面に手持ちケズリを施している。

有台椀 194は高台部が破損しており全形を知り得ないが、94年調査の谷地地区にも定量の出土例がある。これらと同様の高台をもち、「ハ」の字に開き口縁部が外反するタイプである。

蓋 200はつまみ部を欠く破片資料で、上半はケズリで調整されている。

小甕 ロクロ整形の小型甕が出土している。201は短く屈曲した内湾の口縁と緩やかに膨らむ脣部をもつ。脣部内外面にカキメが施され、底部は回転糸切り無調整である。202は小型のもので僅かに有段口縁となる。203も同様の口縁部で内面には炭化物が付着している。

長甕 ロクロ整形によるものが見られる。ロクロ整形の206・207・209・210・213は口縁部が短く屈曲し摘み上げられる。208にみられる縱方向の調整はやや粗めである。調整の断面はU字型でヘラ状の工具によるケズリではなく、指頭によるものとみられる。

鍋 口径37.6cmを測る、ロクロ整形の鍋で、口縁端部が肥厚し断面三角形を呈する。

墨書き土器 182～185の墨書きはすべて土師器無台椀にされており4点確認されている。全体を知り得るものはないが一文字ないし記号が記されていると思われる。

黒色土師器

無台椀 身が深く口径14cm以上の大型品（188）のほかは口径13cm前後のものが主体である。器形は土師器無台椀A類に相当するもの（186・187・192・193）と径高指數40以上の深身で口縁部が上方に立ち上がるもの（188～190）がある。調整技法には体部下半や底部側面をケズリ調整するもの（186・189）、底部の回転糸切りや側面を手持ちケズリするもの（193）もみられる。内外面全体をヘラミガキする精製品は見られず、調整の簡略化が認められる。なお、195・196は黒色処理されないものであるが、調整技法に共通性が認められるもので本来は黒色土師器として製作されたものと考えられる。

須恵器

無台壺 口径 12 ~ 13 cm の小泊産が主体である。222 や 225 は身が浅く底部が大きめなもので、器壁は薄く作られている。223 は底部回転ヘラ切りで、器壁は薄く凹凸が目立つ。226 は口縁部が直線的に立ち上がる。他のものに比べ底部が比較的大きく、器壁が厚めでクロクロ調整の幅が細かい。

有台壺 228 は口縁部が上方に向かって直線的に伸びる深身のもので、断面四角形の低い高台がつく。

有台碗 231・232 は口縁部が直線的に「ハ」の字に立ち上がる身の深いタイプで高台はやや高い。この他に破片資料が出土している。

長頸壺 215・216 はほぼ同様な形態で、口縁部が長く大きく開き、底部はやや大きめでやや寸胴な印象を受ける。その他に 219・220 のような小型のものもある。

大甕 240・241 口の縁部は「く」の字状に折れて大きく外反するタイプのものである。

木製品

馬形 243 の馬形は板材に主頭形の頭部と房状の尾部をつくり、中央部には鞍を表現している。湾曲部が首と臀部を表現している。水辺での祭祀を行なったのち、廃棄したと考えられる。

丸木弓 242 は弓なりに湾曲した木材で現存長 95cm、片方の先端は焼け焦げ焼失している。先端を左右から削り取って弓筈を仕上げている。保持し易くするためか、内側の親指と接する部分を削いで平坦面を作り出している。弦を結んで固定する先端には切り欠きがある。技巧は簡略化されていることから、法弓などの儀式に使用されたと推測される。類例としては山形県米沢市古志田東遺跡で定量出土している。

部材・曲物 244・245 は周囲に 1 ~ 2 cm 四方のホゾ孔が空けられている。246 は箱などの側板と見られ、木釘が打ち込まれている。また、鋭利な金属で描いた渦巻き文や曲線を描いた線刻が施されている。247 は箱型の曲物底板などに使用されたものとみられる。桜皮状の留具が使われている。

杓文字 248 は柾目板を円く加工し先端部を作っている。焦げ跡が見られ柄部は破損・焼失している。

B IV区出土遺物

(1) 道路状遺構

甕 14・15 は「く」の字口縁の甕で内外面ハケメ調整である。16 は短い口縁部が屈曲するもので内外面ハケメ調整である。胴部はあまり張らず長胴気味となる。19 は内湾する口縁部の中位に鶴状の隆帯が付された甕である。18 は丸底の甕底部で、輪積み痕が残る。

(2) 水田跡

甕 6 A グリッドの水田より出土した。23 は胴部最大径が胴下半部にある平底の甕で、輪積痕を残す。最大径付近の外面に、不十分な調整による輪積痕の亀裂があり、漆によって補修を行なっている。単独出土の為、時期比定は困難であるが道路状遺構出土遺物の時期ともあわせて考慮すると中期以降のものとみられる。

第6章　まとめ

1. 古墳時代の水田跡について

IV区では、古墳時代の土器少量とともに畔状遺構が検出された。本来直行する畔も存在するはずであるが貧弱なものであったのか、本遺跡では確認されなかった。畔はIII区で検出された旧河道と平行しており、河道から水田部へ伸びる溝（SD 1～3）も検出されていることから、用排水に関連する溝である可能性が高い。次に道路状遺構とした2条の高まりは、作業用通路であるとともに区画単位を表している可能性もある。仮に区画単位が畔状遺構群2のように6本の畔を含む幅約25～30mであるとすると、SD 1付近にもう1本道路状遺構が存在したことになる。またそうであった場合、SD 1がSD 3と同様に道路状遺構に接していたと推測を重ねることも可能であろう。この場合、III区で水田跡が検出されなかったのは、恐らく河の浸食作用か後世の影響を受け遺構検出には至らなかった為ということになる。

出土遺物は少量で詳細な時期は不明であるが、壺・壺の破片が出土している。旧河道出土土器では古墳時代前期後半以降のものがみられるが、それよりは新しい時期のものと推察する。恐らくは古墳時代中期以降のものであろう。95年調査の外削田地区では前期末ころの水田跡が検出されている。ここでは、水田として可能性のあるものも含め、12基が検出されている。畔は直行しており、一箇所に水口を設けている。畔の幅約1m、水田の区画幅約2～3mで今回の水田跡と幅はほぼ同規模である。また、西方約2kmにある大武遺跡でも弥生時代後期末～古墳時代前期・後期の水田と水路や堰などが木製農具とともに検出されている。詳細は正式報告を待つ必要があるがこの遺跡では縄文時代以降の深さ約5mを測る谷が検出され、古墳時代にはある程度埋没が進んでいたようである（春日1997・1998）。水田では隣接する丘陵上の集落（奈良崎遺跡）居住者が耕作したものとみられ、当時は居住域が存在する丘陵裾部に水路や堰を作って水を引き込み、水稻耕作を行なっていたと考えられる。同様に門新遺跡でも微高地周辺に広く水田を作り開発を進めてきたようである。この開発には東側の丘陵上に所在する上桐神社裏遺跡・赤坂遺跡など弥生時代後期後半から続く中核的な集落の関与が想定される。

この水田が継続して営まれなかつた要因に、微高地上に立地するため水利面で不都合である点が挙げられている（和島村教委1996）。また、氾濫源が形成した自然堤防上に立地するため洪水には成す術もなく、水田を放棄せざるを得なかつたとも言える。しかし逆に言えばこのような立地条件でなければ水田面の整地や畔の構築は、当時の土木技術からすれば相当困難であったと思われる。古墳時代には大武遺跡のように水路は堰を備え用排水の調節は可能であったと考えられるが、用水の供給源である主要河川そのものの制御・治水には大規模な労働力の投入が必要である。このことは現代においてもなお難しい面をもち、度々水害に悩まされていることは周知の事実である。

2. 旧河道出土平安時代の遺物について

(1) はじめに

古代の古志都における土器編年は、八幡林遺跡・門新遺跡・下ノ西遺跡の調査報告によって進められ、編年の基礎は出来上がりつつある。この中で今回の旧河道出土資料は「II期」(10世紀第1四半紀中心)の資料として設定されたもので、さらに翌年の報告では外削田地区 SD07・SK14 出土資料でその内容を補強している〔和島村教委 1995・1996〕。その後、出雲崎町梯子谷遺跡における春日真実氏の編年〔春日 2001〕を受けて八幡林遺跡や下ノ西遺跡における総括的な編年を新たに設定した〔田中 2003・2005〕。以上から旧河道出土土器は春日・田中両氏のいう 10 期頃に該当する。

門新遺跡外削田地区 SD07・SK14〔和島村教委 1996〕、下ノ西遺跡 I 区西 SE202〔和島村教委 1999〕、同水路 1 区 SE956・SX998・SE1009〔和島村教委 2003〕、八幡林遺跡 A 地区 SX16〔和島村教委 2005〕などが改めて 10 期の標識資料となる。10 期の資料としては口縁部が「ハ」の字に開き幅広の高台がつく有台椀 (231・232) が相当し、当期より新たに見られる器種である。土師器食膳具では無台椀が主体で有台椀が僅かにみられ、黒色土器では無台椀のほか有台椀や有台皿も見られる。当該期の須恵器は佐渡小泊窯跡産須恵器が僅かに出土する程度である。なお、本書掲載遺物のうち無台坏 (222～225) や有台坏 (228) は形態的特徴から小泊窯跡群江ノ下窯の段階 (9 期) 以前とみられる。このことから旧河道出土資料はある程度の時期幅を想定しなければならないが、土師器無台椀を多量に出土したことは特筆に値する。そこでこれらを統計的に処理することで大まかな特徴をつかむ事を意図し、次節では以上の編年成果を踏まえて新たに報告された資料との比較を行なうこととする。

(2) 土器の構成比率

遺物の種類は土師器が主体的で、他に黒色土器、須恵器がある。また、未図化の灰釉陶器の小片が 1 点確認された。具体的な比率を算出するにあたり、口縁部残存率計測法〔春日 1994〕とそれを応用した底部残存率計測法〔渡辺 2001〕を用いた。残存の程度は口縁部・底部を 36 等分した場合に $n / 36$ で表され、このとき計測された値 n を残存値として表示している(第 3 表)。掲載遺物以外の資料も含め口縁部残存率計測法での計測結果は土師器約 87.8%・須恵器 8.2%・黒色土器 4.0% であった。また、機能別組成比率は食膳具が 97.4%、煮炊具が 2.1%、貯蔵具 0.5% であるが、須恵器大甕は体部のみで数値化されないため実際の値は増える見込みである。食膳具では土師器が 88.0%、須恵器が 7.9%、黒色土器が 4.1% と土師器が圧倒的に多い。また、貯蔵具の中では長頸壺が一定量認められることが特徴的である。土師器無台椀では、口縁部残存値 (3706 / 36 ≈ 102.9 個体) を底部残存値 (6726 / 36 ≈ 186.83 個体) が上回っており、後者の値のほうがより実数に近い値であると考えられる。

ほぼ同時期とされる外削田地区 SD07 でも同様な器種構成がみられ、土師器 77.4%、須恵器 9.7%、黒色土器 9.7%、灰釉陶器 3.2% である〔和島村教委 1996〕。また、下ノ西遺跡 SE956・SE1009 出土遺物は井戸廐絶時に行なわれた祭祀行為に伴う一括廐棄とみられる資料である。どちらも土師器無台椀が多数を占めるが須恵器や黒色土器は 1 割にも満たない。これは、遺構の性格に起因する問題であろうか、後続する門新遺跡 SD03 下層・同 SD151・SD152・SE10 出土の食膳具構成比率は各遺構とも土師器が 9 割を超え、須恵器は 1 割前後に低下している〔和島村教委 1995〕。以上の数値は個体識別による算出であることを考慮しても須恵器の構成比率には大きな差異が指摘できる。

(3) 食膳具の法量と形態

旧河道からは土師器無台椀をはじめ食膳具が多量に出土したことから、本項では法量に器種毎の傾向を把握することを試みた。具体的には、径高指数、底径指数といった口径・器高・底径の相関グラフを作成した。対象遺物は本書に掲載した遺物で、その殆どが遺存度の高いものとなっている。径高指数は身の深さの度合いを、底径指数は口径に対する底部の大きさを示している。グラフでは直線の傾きがこれを表し、角度が急なほど指数が高いことになる。

旧河道出土の土師器無台椀では、A～F類の分類別でみると口径 12～13 cm 前後と 14～15 cm 前後、底径 5～6 cm 前後と 6～7 cm 前後のものがみられる。特に E 類は 6～7 cm の比較的大きい底部を有する形態であることが明瞭に認められる(第 10 図)。ほぼ同時期に位置付けられる下ノ西遺跡水路 I 区 SE956 や SE1009 出土遺物などでも同様の分布を示している。形態は特に E 類や F 類が多くみられる。これに後続する門新遺跡 SD151・同 SD152・同 SE10 では口径 11～12 cm 代、底径 4～5 cm 代のものも定量見られ全体的に小型化傾向が指摘できる。須恵器無台杯では器壁が厚めでやや深いもの(226・227)と器壁が薄く浅身のもの(222～225)に区分できる。前者は径高指数 27～32 で口縁部の立ち上がりが急なもので、時期は 7 期以前とみられる。後者は径高指数 20～25 で小泊窯跡群の製品である。口縁部の立ち上がりや底部の薄さなどを考慮すると 7～9 期の時期幅がありそうである。黒色土器は傾向指数 30 ほどで身が浅いもの(193)、36～41 の中間的なもの(186～188・190・191)、47 の身が深いもの(189)に区分できる。

(4) 食膳具の観察

食膳具は大量に出土することからも分かるように、専門工人による大量生産を前提に製作されている。その為か形態的特徴に乏しいものであるが、幾つかの点について観察を行なった。

まず、土師器食膳具すべてを対象に残存率による個体数を算出する作業と同時に、底部切り離し・調整技法について集計した。底部の切り離しは、須恵器無台杯ではヘラ切り無調整、土師器無台椀では糸切り無調整が主であった。また、土師器有台椀では糸切り無調整のまま高台を貼り付けた資料(194)がある。黒色土師器では底部と体部下半をロクロヘラケズリするものが主流であるが、糸切り無調整のものもみられる。また、黒色土師器と同様に非黒色処理の無台杯(195・196)でも同様の調整技法が存在する。

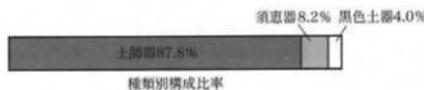
次に、土師器無台椀で切り離し時のロクロ回転方向を観察した。回転方向は、底部に残る渦状の糸切り痕が左右どちらに偏心しているかを見ることで判別が可能である。右回転の場合は中心が左に偏り、一笔書きの「9」の字形の線が幾重にも重なったように見える。また、糸を入れる際に体部側面から糸切り痕が入る資料も少なからずあり、この場合底部が欠損していても判別できることがある。このようにして回転方向を判別できた資料は 193 点あり、そのうち左回転は 35 点(18.1%)、右回転は 158 点(81.9%)で、底部残存率計測法では前者が 17.7%、後者が 82.3% である。因みに右回転の比率を分類別に見てみると、A 類 85.0%・B 類 66.7%・C 類 50%・D 類 51.5%・E 類 94.8%・F 類 100% という結果であった。

3 点目は、食膳具の用途転用についてである。土師器無台椀には煤やタールが付着したものがみられ、灯明皿として使用された痕跡が残っている。使用する際に口縁部を僅かに打ち欠いて芯を固定したとみられるもの(149)もある。無台椀全体のうち約 12% が灯明皿に転用されていることになる。

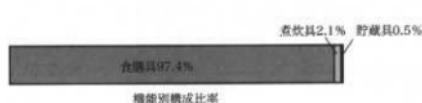
種類	機能	器種	口残値	計測点数		底残値	計測点数	
土師器	食膳具	环蓋	15	0.3%	1	0.1%	0	0.0%
		無台环	4	0.1%	2	0.3%	22	0.3%
		無台碗	3706	83.5%	679	88.6%	6726	87.6%
	煮炊具	有台碗	79	1.8%	6	0.8%	36	0.5%
須恵器	食膳具	小甕	21	0.5%	4	0.5%	102	1.3%
		長甕	65	1.5%	12	1.6%	0	0.0%
		鍋	5	0.1%	1	0.1%	0	0.0%
	黑色土器	食膳具	無台碗	179	4.0%	15	2.0%	264
合計			4438	100.0%	766	100.0%	7676	100.0%
土器構成比率集計表								

土器構成比率集計表

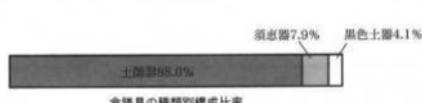
種類別	口残値	割合
土師器	3895	87.8%
須恵器	364	8.2%
黒色土器	179	4.0%
合計	4438	



機能別	口残値	割合
食膳具	4324	97.4%
煮炊具	91	2.1%
貯藏具	23	0.5%
合計	4438	



種類別	口残値	割合
土師器	3804	88.0%
須恵器	341	7.9%
黒色土器	179	4.1%
合計	4324	

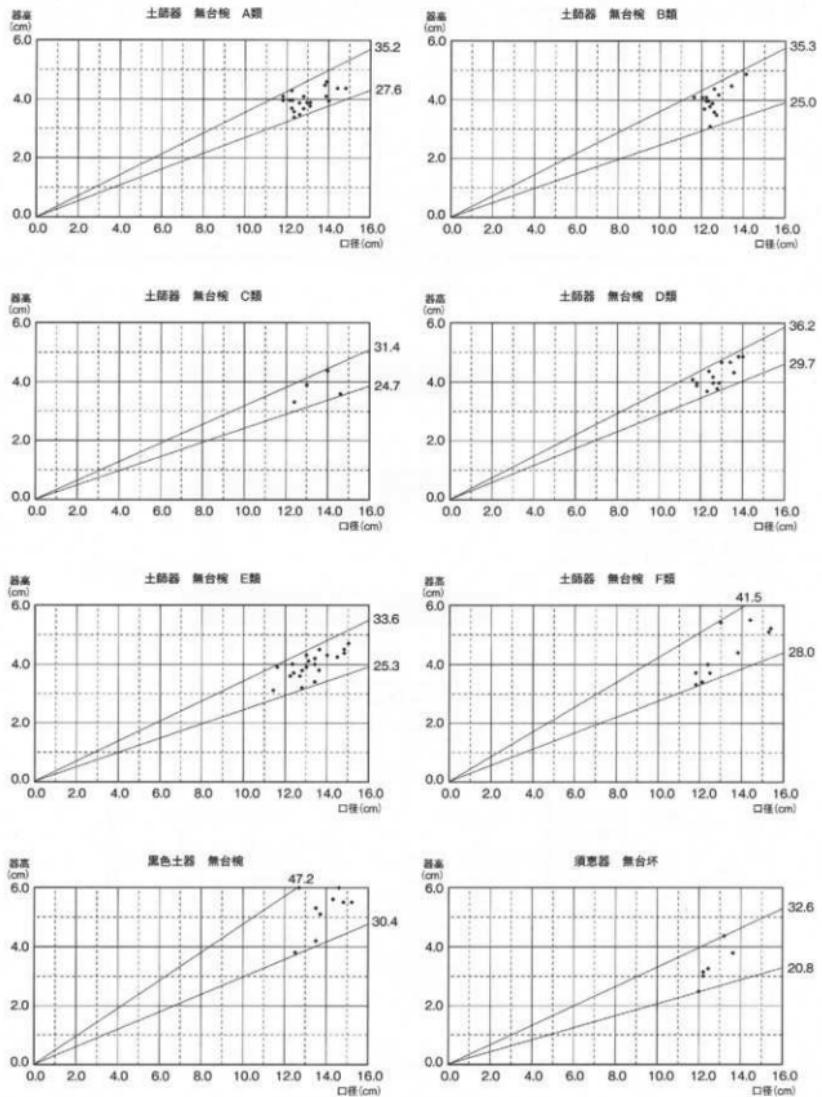


種類	器種	切り離し技法	ロクロ方向(右)	ロクロ方向(左)	方向不明	合計
土師器	無台碗	糸切り	4171 158	82.6% 81.9%	879 35	17.4% 18.1%
		ロクロケズリ	0 0	— —	20 1	— —
	無台环	ヘラ切り	0 0	— —	0 0	— —
		手持ちケズリ	0 0	— —	0 0	— —
須恵器	無台环	ヘラ切り	72 2	47.7% 40.0%	79 3	52.3% 60.0%
黒色土器	無台碗	糸切り	72 2	100.0% 100.0%	0 0	— —
		ロクロケズリ	24 1	80.0% 50.0%	6 1	20.0% 50.0%
	小甕	糸切り	25 1	100.0% 100.0%	0 0	— —
		無調整	— —	— —	— —	— —

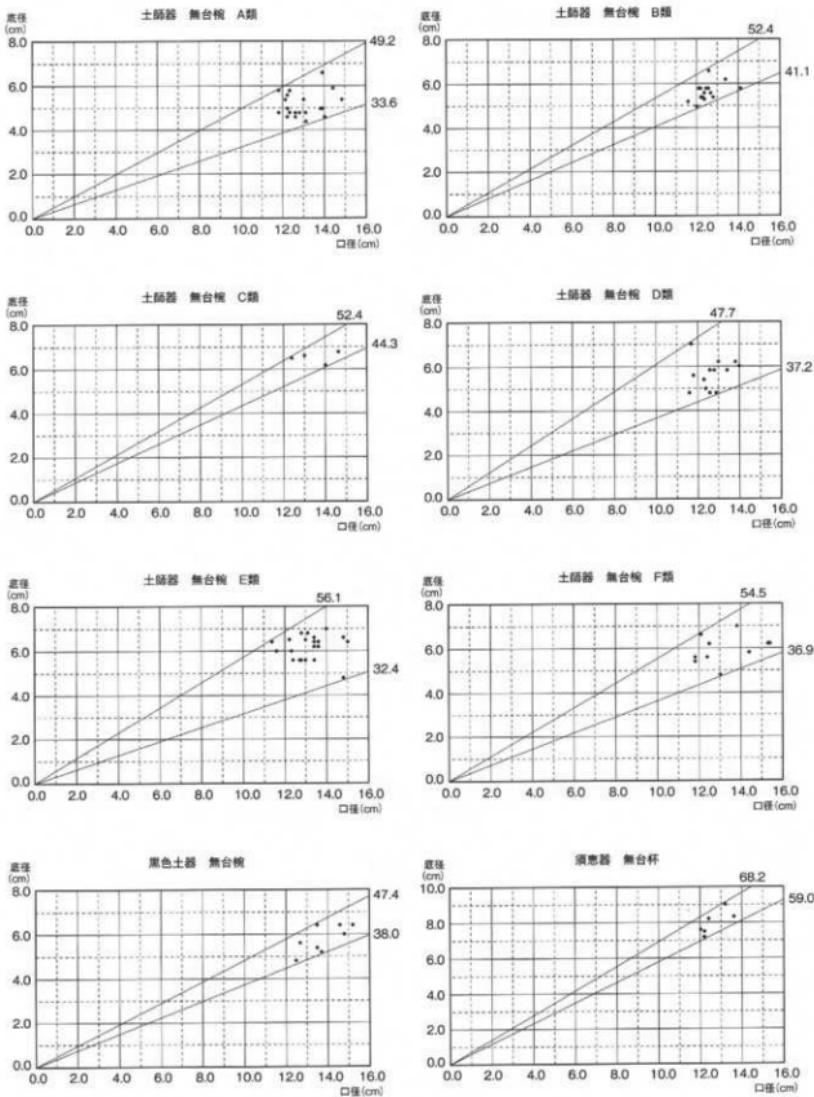
(上段：底部残存値 下段：計測点数)

底部の切り離し技法・回転方向集計表

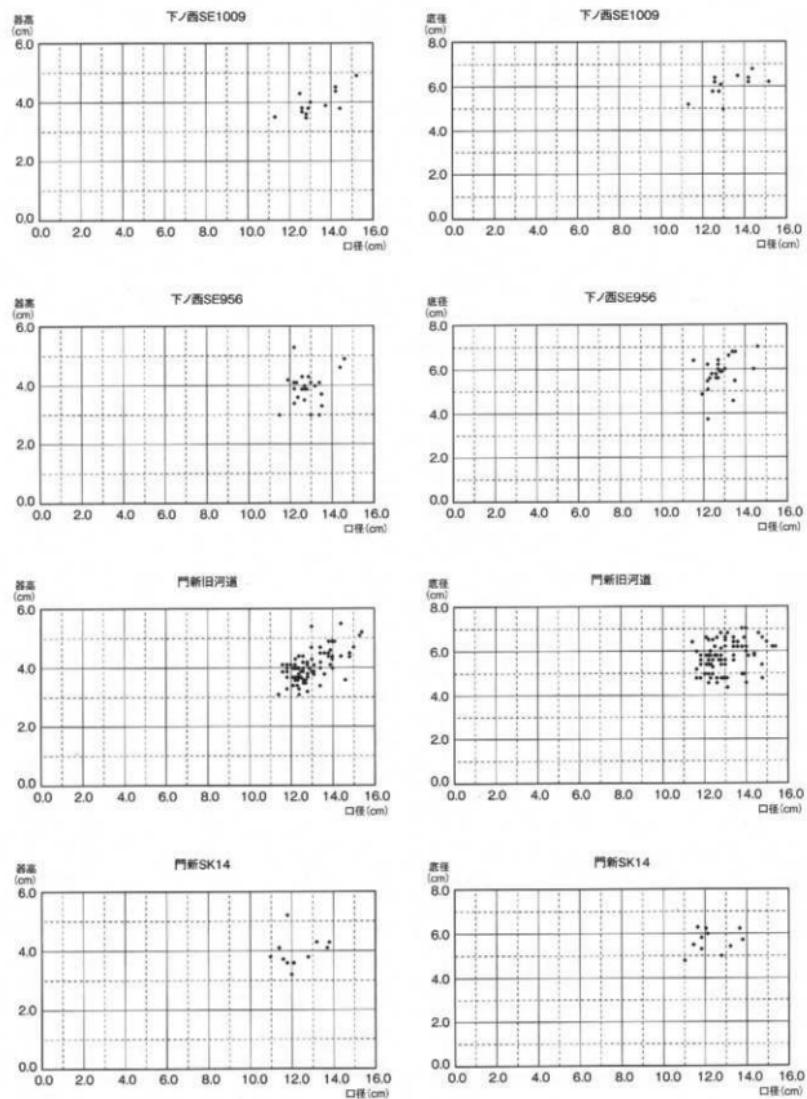
第3表 旧河道出土土器計測値集計表



第9図 径高指数



第10図 底径指數



第 11 図 遺跡別法量分布図

引用参考文献

- 春日真実 1994 「第IV章まとめ」「之一口遺跡東地区」新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 新潟県教育委員会
- 春日真実 2001 「第VI章まとめ2.和島・出雲崎地域における7世紀末から10世紀の土器の変遷」「梯子谷窯跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集 新潟県教育委員会
- 春日真実 2002 「奈良崎遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 新潟県教育委員会
- 久我 勇 1990 「上桐三ヶ村」新潟県三島郡和島村村落史資料集③ 和島村史編さん室
- 駒見和夫 1996 「下小島谷古墳群」「和島村史」資料編Ⅰ自然・原始古代・中世・文化財
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 田嶋明人 1986 「IV 考察」「漆町遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 田中 靖 2003 「第VI章まとめ2.出土土器について」「下ノ西遺跡IV」和島村埋蔵文化財調査報告書第9集
- 田中 靖 2005 「第V章まとめ2.出土土器について」「八幡林遺跡IV」和島村埋蔵文化財調査報告書第10集
- 手塚 孝 2001 「古志田東遺跡」米沢市埋蔵文化財調査報告書第73集 米沢市教育委員会
- 寺村光晴 1991 「大久保古墳群」「寺泊町史」資料編Ⅰ原始・古代・中世 寺泊町
- 戸根与八郎 1998 「中世編第三章 考古資料から見た和島村」「和島村史」資料編Ⅰ自然・原始古代・中世・文化財
- 藤田 剛・長谷川正 1996 「自然編 第一章和島村の地形・地質」「和島村史」資料編Ⅰ自然・原始古代・中世・文化財
- 八重樫由美子 2004 「新潟県寺泊町屋舗塚遺跡発掘調査報告書」寺泊町教育委員会
- 和島村 1996 「和島村史」資料編Ⅰ自然・原始古代・中世・文化財
- 和島村 1998 「和島村史」通史編
- 和島村教育委員会 1992 「八幡林遺跡」和島村埋蔵文化財調査報告書第1集
- 和島村教育委員会 1993 「八幡林遺跡」和島村埋蔵文化財調査報告書第2集
- 和島村教育委員会 1994 「八幡林遺跡」和島村埋蔵文化財調査報告書第3集
- 和島村教育委員会 1995 「門新遺跡」和島村埋蔵文化財調査報告書第4集
- 和島村教育委員会 1996 「門新遺跡 外割田地区」和島村埋蔵文化財調査報告書第5集
- 和島村教育委員会 1998 「下ノ西遺跡」和島村埋蔵文化財調査報告書第7集
- 和島村教育委員会 1999 「下ノ西遺跡II」和島村埋蔵文化財調査報告書第8集
- 和島村教育委員会 2000 「下ノ西遺跡III」和島村埋蔵文化財調査報告書第9集
- 和島村教育委員会 2003 「妙満寺跡」和島村埋蔵文化財調査報告書第13集
- 和島村教育委員会 2003 「下ノ西遺跡IV」和島村埋蔵文化財調査報告書第14集
- 和島村教育委員会 2003 「北野丸山遺跡」和島村埋蔵文化財調査報告書第15集
- 和島村教育委員会 2005 「八幡林遺跡IV」和島村埋蔵文化財調査報告書第16集
- 渡邊明和 2001 「第V章 遺物」「第VII章 まとめ2. 遺物」「寺道上遺跡発掘調査報告書」新津市教育委員会

遺物調査表

(凡例)

1. 長さ: 直径

長: 長石 石: 石英 手: チャート 角: 角閃石

2. 潜在度を以てのとおり A～D の 4 段階で示した。

B: 完形成、またはそれに近い状態で復元可能。

C: 既成から口縫部まで外を失却可能で鉛錠上に空洞部を残さないもの。

D: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

E: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

D: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

E: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

F: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

G: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

H: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

I: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

J: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

K: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

L: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

M: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

N: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

O: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

P: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

Q: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

R: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

S: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

T: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

U: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

V: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

W: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

X: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

Y: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

Z: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[A]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[B]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[C]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[D]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[E]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[F]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[G]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[H]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[I]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[J]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[K]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[L]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[M]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[N]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[O]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[P]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[Q]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[R]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[S]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[T]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[U]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[V]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[W]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[X]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[Y]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[Z]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[A]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[B]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[C]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[D]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[E]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[F]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[G]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[H]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

[I]: 既成の一部のみ遺失するものや、その他の C に該当しないもの。

調査時代の土器

No.	出土地点等	層位	種別	器形	口径	底径	厚さ	断土	調査など	発掘実績	色調(外) / 色調(内)
1	伝文化集中 No.4	田畠	十輪路	甕	15.6	16.8	1.2	長・石 長・石 長・石	ヨコナデハケヌ ヨコナデハケヌ	D 4 D 6	灰青色 にざい黄褐色
2	田畠 No.9	田畠	十輪路	甕	18.2	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 13	灰青色 にざい黄褐色
3	田畠 No.17	田畠	十輪路	甕	15.8	-	-	手・灰	ヨコナデハケヌ	D 3	灰青色 にざい黄褐色
4	田畠 No.18	田畠	十輪路	甕	14.8	-	-	手・灰	ヨコナデハケヌ	D 5	灰青色 にざい黄褐色
5	田畠 No.11	田畠	十輪路	甕	15.4	10	10.5	手・灰 手・灰	内側黒色底面	B 25	1
6	田畠 No.18	田畠	十輪路	甕	8.6	8.2	-	手・灰 手・灰	ヘタケヌ	D 14	2
7	田畠 No.16	田畠	十輪路	甕	14.2	5	9	手・灰 手・灰	内側黒色底面	C 9	8
8	田畠 No.15	田畠	十輪路	甕	13.2	-	-	手・灰 手・灰	ヘタケヌ ヘタケヌ	D 3	2
9	田畠 No.26	田畠	十輪路	甕	16.6	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 6	灰青色 にざい黄褐色
10	田畠 No.26	田畠	十輪路	甕	17	6.4	27	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 18	8
12	田畠 No.12	田畠	十輪路	甕	18.5	6	25	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 12	灰青色 にざい黄褐色
13	田畠 No.16	田畠	十輪路	甕	19.5	6	22.3	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 2	灰青色 にざい黄褐色
14	遺物遺構 No.5(A8)	土塹路	甕	手・灰	19.4	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 6	灰青色 にざい黄褐色
15	遺物遺構 No.5(A8)	土塹路	甕	手・灰	12.2	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 6	灰青色 にざい黄褐色
17	遺物遺構 No.5(A8)	土塹路	甕	手・灰	13.4	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 6	灰青色 にざい黄褐色
18	遺物遺構 No.5(A8)	土塹路	甕	手・灰	14	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 7	36
19	遺物遺構 No.5(A8)	土塹路	甕	手・灰	15	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 7	36
20	遺物遺構 No.5(A8)	土塹路	甕	手・灰	6	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 18	灰青色 にざい黄褐色
21	遺物遺構 No.5(A8)	土塹路	甕	手・灰	6.6	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 20	灰青色 にざい黄褐色
22	遺物遺構 No.5(A8)	土塹路	甕	手・灰	5.4	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 36	灰青色 にざい黄褐色
23	IVK. 本川 No.1	手・灰	手・灰	甕	5.2	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 18	灰青色 にざい黄褐色
24	田畠 No.98	手・灰	手・灰	甕	12.6	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 3	灰青色 にざい黄褐色
25	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	14.2	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 4	灰青色 にざい黄褐色
26	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	15.8	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 3	灰青色 にざい黄褐色
27	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	15	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 5	灰青色 にざい黄褐色
28	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	14	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 4	灰青色 にざい黄褐色
29	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	15.6	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 8	灰青色 にざい黄褐色
30	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	21.6	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 7	灰青色 にざい黄褐色
31	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	20.2	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	B 33	36
32	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	19	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 34	灰青色 にざい黄褐色
33	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	18.4	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	D 7	灰青色 にざい黄褐色
34	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	17	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	明暗	明暗
35	田畠 No.1	手・灰	手・灰	甕	15	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	明暗	明暗
36	田畠 No.85	手・灰	手・灰	甕	14.8	-	-	手・灰 手・灰	ヨコナデハケヌ	明暗	明暗

No.	出土地点等	樹位	種別	樹種	口径	底 / 頂面	底高	断土	測量など	遺物質	(底 / 頂)	色調 (内面)	色調 (外面)	
37	田区川 砂利層	土師器	要	18.6				長・G	ハサメ	D	3	明茶褐色	にぶい茶褐色	
38	田区川 砂利層	土師器	要	18.4				底・G・差	ヨコナデハサメ	D	7	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
39	田区川 砂利層	土師器	要	11.1				基	ハサメ	D	4	明茶褐色	にぶい茶褐色	
40	田区川 砂利層	土師器	要	15.1				長・石	ハサメ	D	4	明茶褐色	にぶい茶褐色	
41	田区川 N-V層	土師器	要	17.2				石・手	ハサメ	D	1	明茶褐色	にぶい茶褐色	
42	田区川 砂利層	土師器	要	16				長・手	ハサメ	D	5	明茶褐色	にぶい茶褐色	
43	田区川 1・12層	土師器	要	18.1				長・手	ハサメ	D	3	明茶褐色	にぶい茶褐色	
44	田区川 14層	土師器	要	20				長・手	ヨコナデ	D	5	明茶褐色	にぶい茶褐色	
45	田区川 砂利層	土師器	要	11.6				石・手	ヨコナデ	D	4	明茶褐色	にぶい茶褐色	
46	田区川 N-V層	土師器	要	11				受盤に落灰状 断面斜状X	ハサメ	D	10	黒	にぶい茶褐色	
47	田区川 砂利層	土師器	要	20.9	12.4	15		石・手	ハサメ	D	11	黒	黒	
48	田区川 砂利層	土師器	要	11.8				石・手	ハサメ	D	5	明茶褐色	にぶい茶褐色	
49	田区川 砂利層 No.49	土師器	有孔体	11.2	11.6			石・手	ヨコナデハサメヘタツヂ	A	3	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
50	田区川 砂利層 No.81	土師器	土師器	17				石・手・差	内外両面形 古墳		36	明茶褐色	にぶい茶褐色	
52	田区川 V層	土師器	要	15				石・手	ハサメ		4	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
53	田区川 No.51	土師器	要	11	10.9			長・手	ハサメ	A	14	黒	にぶい茶褐色	
54	田区川 砂利層	土師器	要	8.4				石・手	ハサメ	D	36	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
55	田区川 14層	土師器	要	7.5	10			石・手	ハサメ	B	20	30	にぶい茶褐色	
56	田区川 砂利層	土師器	要	15				石・手	ハサメ	B	6	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
57	田区川 砂利層	土師器	要	13.2				石・手	ハサメ	B	4	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
58	田区川 砂利層	土師器	要	12.8				石	サヲタ伏条原	B	6	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
59	田区川 N-V層	土師器	要	12				石・手	ハサメ	B	6	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
60	田区川 N-V層	土師器	要	12.4				石・手	ヨコナデハサメ	B	7	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
61	田区川 N-V層	土師器	要	16				石・手	ハサメ	B	6	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
62	田区川 集中区一場	土師器	要	19.4	6	23.2		石・手	ハサメ	A	13	21	明茶褐色	にぶい茶褐色
63	田区川 集中区一場	土師器	要	16.4				手	ヨコナデハサメ	A	3	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
64	田区川 砂利層	土師器	要	12				手	ハサメ	B	2	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
65	田区川 N-V層	土師器	要	13.6				手	ヨコナデハサメ	B	8	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
66	田区川 砂利層	土師器	要	7.9				手	ヨコナデハサメ	B	6	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
67	田区川 砂利層	土師器	要	8.2				手	ヨコナデハサメ	B	6	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
68	田区川 砂利層	土師器	要	19.6				石・手	ハサメ	B	4	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
69	田区川 14層	土師器	要	14.4				石・手	ハサメ	B	6	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
70	田区川 砂利層	土師器	要	29				手	ヨコナデハサメ	B	18	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
71	田区川 砂利層	土師器	要	24.2				手	ハサメ	B	2	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
72	田区川 砂利層	黑色陶器	要	19				石・手	ハサメ	B	3	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
73	田区川 砂利層	黑色陶器	要	21				石・手	ハサメ	黒	黒	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
74	田区川 砂利層	黑色陶器	要	13.6				石・手	ハサメ	黒	黒	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
75	田区川 砂利層	黑色陶器	要	15.8				石・手	ハサメ	黒	黒	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
76	田区川 N-V層	黑色陶器	要	15.1				石・手	ハサメ	黒	黒	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
77	田区川 砂利層	黑色陶器	要	11				石・手	ハサメ	黒	黒	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
78	田区川 N-V層	黑色陶器	要	12.4	9.3			石・手	ハサメ	黒	黒	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色	
79	田区川 砂利層	黑色陶器	要	11.9	5.2			手	ヨコナデハサメ	B	14	29	にぶい茶褐色	にぶい茶褐色
80	田区川 砂利層	土師器	要											
81	田区川													

No.	出土地の寺号	層位	種別	器形	底径	口径	高さ	底面	底形	底面形状	底面寸法	断面	断面寸法	外観	その他の特徴
82	田原山	砂利層	土師器	無台輪	12.5	5.8	3.4	27.6	47.2	直口				6	A 9 36
83	田原山	14層	砂利層	無台輪	12.6	4.8	3.5	27.7	38.1	4.1・直・手・白	4.1・直・手・白	4.1・直・手・白	6	A 30 36	
84	田原山 No.32・43	100層	砂利層	無台輪	12.8	6.1	3.7	28.0	47.7	4.1・長・手・手・白	4.1・長・手・手・白	4.1・長・手・手・白	6	A 23 36	
85	田原山	14層	土師器	無台輪	13.1	4.4	3.8	29.0	33.0	4.1・手・手・白	4.1・手・手・白	4.1・手・手・白	6	A 22 36	
86	田原山	14層	土師器	無台輪	12.5	4.8	3.6	29.3	39.0	長・手・白	長・手・白	長・手・白	6	B 11 22	
87	田原山	14層	土師器	無台輪	13.1	4.8	3.9	29.8	36.6	長・手・白	長・手・白	長・手・白	6	B 4 36	
88	田原山	14層	土師器	無台輪	11.8	5.8	4.1	34.7	49.2	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 12 36	
89	田原山	砂利層	土師器	無台輪	13.2	5.6	3.7	30.3	45.9	4.1・手・手・白	4.1・手・手・白	4.1・手・手・白	6	B 3 36	
90	田原山 No.70	100層	砂利層	無台輪	12.2	4.6	3.0	31.0	36.5	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 22 36	
91	田原山 No.87	土師器	無台輪	12.6	4.6	3.9	31.0	36.5	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 5 36		
92	田原山 No.64	土師器	無台輪	12.8	4.8	4.1	32.0	37.5	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 20 36		
93	田原山 No.76	土師器	無台輪	12.2	5	4	32.8	41.0	6.1・手・手・白	6.1・手・手・白	6.1・手・手・白	6	B 6 27		
94	田原山	14層	土師器	無台輪	12.1	5.4	4.1	44.6	47.6	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 8 36	
95	田原山	砂利層	土師器	無台輪	11.8	4.8	4	33.9	40.7	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 24 36	
96	田原山	砂利層	土師器	無台輪	12.2	4.6	4.3	35.2	37.7	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 17 10	
97	田原山	14層	土師器	無台輪	14.6	4	29.6	32.0	46.0	4.1・手	4.1・手	4.1・手	6	A 36 36	
98	田原山	砂利層	土師器	無台輪	13.9	5	4.1	29.5	36.0	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 5 36	
99	田原山	14層	土師器	無台輪	14.8	5.4	4.4	28.7	36.6	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 22 36	
100	田原山	砂利層	土師器	無台輪	14.4	5.9	4.4	30.6	41.0	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	C 2 19	
101	田原山	14層	土師器	無台輪	13.8	5	4.5	32.6	41.0	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 16 36	
102	田原山	砂利層	土師器	無台輪	13.9	6.6	4.5	33.1	47.5	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 31 36	
103	田原山 No.16	土師器	無台輪	12.4	5.3	3.1	25.0	42.7	6.1・手・手・白	6.1・手・手・白	6.1・手・手・白	6	A 32 36		
104	田原山	14層	土師器	無台輪	12.7	5.6	3.5	27.6	52.4	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 10 27	
105	田原山	14層	土師器	無台輪	12.6	6.6	3.6	28.6	52.4	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 24 36	
106	田原山 集中区-95	土師器	無台輪	12.8	5.4	4.2	32.8	42.2	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 6 36		
107	田原山 No.94	砂利層	土師器	無台輪	13.4	6.2	4.5	33.6	46.3	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 16 36	
108	田原山 No.94	砂利層	土師器	無台輪	12.2	5.8	4.1	33.6	47.5	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 7 36	
109	田原山 No.11	土師器	無台輪	12.1	5.8	3.7	30.6	47.9	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 22 36		
110	田原山 No.62	砂利層	土師器	無台輪	12.4	5.6	3.6	30.6	45.2	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 28 36	
111	田原山 No.12	土師器	無台輪	12.5	5.8	3.9	31.2	46.4	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 25 36		
112	田原山 No.86	土師器	無台輪	12.5	6	4.1	34.2	41.7	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 5 36		
113	田原山 No.92	砂利層	土師器	無台輪	12.6	5.8	4.4	34.9	46.0	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 3 36	
114	田原山	14層	土師器	無台輪	12.3	5.4	4	32.5	43.9	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 17 36	
115	田原山	砂利層	土師器	無台輪	12.2	5.8	4	32.8	47.5	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 23 36	
116	田原山	砂利層	土師器	無台輪	12.9	5.8	4	32.6	44.3	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 36 36	
117	田原山	14層	土師器	無台輪	11.6	5.2	4.1	35.3	44.8	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 9 36	
118	田原山 No.66	土師器	無台輪	14.1	5.8	4.9	34.8	41.1	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 36 36		
119	田原山 No.86	土師器	無台輪	12.4	6.5	3.3	26.6	52.4	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	D 13 20		
120	田原山 No.92	砂利層	土師器	無台輪	14	6.2	4.4	31.4	44.3	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 7 19	
121	田原山	砂利層	土師器	無台輪	14.6	6.8	3.6	24.7	46.6	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	D 7 14	
122	田原山	砂利層	土師器	無台輪	13	6.6	3.9	36.0	50.8	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	C 8 12	
123	田原山	砂利層	土師器	無台輪	12.3	5.6	3.8	29.7	45.3	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 9 36	
124	田原山 No.40	砂利層	土師器	無台輪	12.3	5.4	3.7	30.1	43.9	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 36 36	
125	田原山 No.37	土師器	無台輪	12.6	4.8	4	31.0	37.2	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 26 36		
126	田原山	砂利層	土師器	無台輪	12.6	4.8	4	31.7	38.1	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 20 36	
127	田原山	砂利層	土師器	無台輪	11.8	5.6	3.9	33.3	47.5	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 28 36	
128	田原山 No.74	砂利層	土師器	無台輪	12.6	5.6	4.2	33.0	46.0	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	B 11 36	
129	田原山	土師器	無台輪	11.8	5.6	4	35.0	47.5	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 36 36		
130	田原山 No.94	砂利層	土師器	無台輪	11.6	5.8	4.1	35.3	41.4	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	5.1・手・手・白	6	A 11 36	

No.	出典地図等	解説	編所	地名	地性	沿岸	海岸指標	海岸指標	船上	色調(緑色)	色調(褐色)	測量・走り地	測量・走り地	測量・走り地
131	田川区 No.14	砂利層	上鉛層	無台地	13.8	6.2	4.9	36.5	4.9	石・長・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
132	田川区 No.55・56	砂利層	上鉛層	無台地	13.4	5.8	4.7	35.1	43.3	石・手・赤・青	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
133	田川区 No.55・56	砂利層	上鉛層	無台地	14	6	4.9	35.1	42.9	石・手・赤・青	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
134	田川区 No.59	砂利層	上鉛層	無台地	12.4	5	4.4	35.5	40.3	石・手・白・赤	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
135	田川区 No.64・86	砂利層	上鉛層	無台地	13	6.2	4.7	36.2	47.7	石・手・白・赤	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
136	田川区 No.71	砂利層	上鉛層	無台地	11.4	6.4	3.1	27.2	56.1	石・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	C
137	田川区 No.97	砂利層	上鉛層	無台地	12.2	6.5	20.5	53.3	53.3	石・長・手・赤	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
138	田川区 No.96	砂利層	上鉛層	無台地	13.4	6.6	4	29.9	48.3	石・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
139	田川区	V層	上鉛層	無台地	12.7	6.6	3.6	28.3	54.0	石・手・赤・青	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
140	田川区	砂利層	上鉛層	無台地	12.8	6.8	3.6	25.0	53.1	石・手・白・赤	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
141	田川区 No.86	砂利層	上鉛層	無台地	13.4	5.6	3.4	25.4	41.6	石	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
142	田川区 No.71	砂利層	上鉛層	無台地	13.6	6.4	3.8	27.9	47.1	長・手・赤	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
143	田川区 No.53	砂利層	上鉛層	無台地	12.8	5.6	3.8	43.8	48.8	石・手・赤・青	にぶい緑	岩礁系切り	左	B
144	田川区 No.54	砂利層	上鉛層	無台地	12.4	6.6	3.7	29.8	45.2	手・長・角	にぶい緑	岩礁系切り	右	A
145	田川区	V層	上鉛層	無台地	13.4	6.4	4	29.9	47.8	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
146	田川区 No.11・12層	砂利層	上鉛層	無台地	13	5.6	3.9	30.0	43.1	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
147	田川区 No.82・86	砂利層	上鉛層	無台地	1.6	7	4.3	30.7	50.0	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
148	田川区 集中区-55	砂利層	上鉛層	無台地	13.1	6.8	4.1	31.3	51.9	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
149	田川区 集中区-84	砂利層	上鉛層	無台地	13.4	6.2	4.2	31.3	45.6	手・手・赤	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
150	田川区 No.33	砂利層	上鉛層	無台地	13.6	6.2	4.5	33.1	45.6	手・手・赤	にぶい緑	岩礁系切り	左	B
151	田川区 No.84	砂利層	上鉛層	無台地	14.8	6.6	4.5	30.4	44.6	手・手・赤	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
152	田川区 No.8	砂利層	上鉛層	無台地	12.3	6	4	32.5	48.8	手・手・白・赤	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
153	田川区 No.95	砂利層	上鉛層	無台地	13	6.5	4.3	33.1	50.0	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
154	田川区 No.7	砂利層	上鉛層	無台地	11.6	6	3.9	33.6	51.7	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
155	田川区	V層	上鉛層	無台地	1.5	6.4	4.7	31.3	42.7	手・長・赤	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
156	田川区 集中区	14層	上鉛層	無台地	14.8	5.8	4.4	29.7	32.4	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
157	田川区 集中区-15	上鉛層	無台地	12.1	6.6	3.4	28.1	45.6	長・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A	
158	田川区	14層	上鉛層	無台地	12.5	6.2	3.7	29.6	49.6	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
159	田川区 No.14	砂利層	上鉛層	無台地	11.8	5.6	3.3	28.0	47.5	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
160	田川区	14層	上鉛層	無台地	11.8	5.4	3.7	31.4	45.8	長・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
161	田川区 No.1	砂利層	上鉛層	無台地	13.8	7	4.4	31.9	50.7	長・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
162	田川区 No.5	砂利層	上鉛層	無台地	12.4	5.6	4	32.3	45.2	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
163	田川区 No.13	砂利層	上鉛層	無台地	13	4.8	5.4	41.5	36.9	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
164	田川区 No.2	砂利層	上鉛層	無台地	15.3	6.2	5.1	33.3	40.5	長・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
165	田川区 No.34	砂利層	上鉛層	無台地	15.4	6.2	5.2	33.8	40.3	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
166	田川区	V層	上鉛層	無台地	13	5.8	5.5	38.2	40.3	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
167	田川区	14層	上鉛層	無台地	12.4	4.6	4.5	36.3	37.1	4・長・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
168	田川区	砂利層	上鉛層	無台地	11.8	6.6	3.2	27.1	55.9	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
169	田川区	砂利層	上鉛層	無台地	10.2	6	3.7	36.3	58.8	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
170	田川区	13層	上鉛層	無台地	11.6	4.8	3.5	30.2	41.4	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
171	田川区	砂利層	上鉛層	無台地	13	7	4.5	34.6	53.8	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
172	田川区 No.68	砂利層	上鉛層	無台地	12.4	5	3.5	28.2	40.3	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
173	田川区	14層	上鉛層	無台地	13	4.8	3.8	29.2	36.9	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
174	田川区	14層	上鉛層	無台地	12.4	4.2	3.8	32	35.6	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
175	田川区	砂利層	上鉛層	無台地	11.8	6.6	3.2	29.1	50.9	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
176	田川区	14層	上鉛層	無台地	12	6.4	3.5	31.8	53.3	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
177	田川区 No.60	砂利層	上鉛層	無台地	11.6	4.2	4	31.7	33.3	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	左	A
178	田川区	砂利層	上鉛層	無台地	15.8	7.5	4.2	26.6	47.5	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
179	田川区	砂利層	上鉛層	無台地	11.9	5.8	4.6	38.7	48.7	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	B
180	田川区	砂利層	上鉛層	無台地	13.4	7.2	4	29.9	53.7	手・手・白	にぶい緑	岩礁系切り	右	C

No.	所在地点等	場所	種別	透明	不透	底面	底面形状	底面形状數	底面形状	色調(外側)	色調(土)	透明	透明度	底面	底面
181	■■区川	斜利斯	土渤海	無	12.4	6	4.1	33.1	48.4	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
182	■■区川	斜利斯	土渤海	無	14.2	7.4	4.1	28.9	52.1	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
183	■■区川 No.3	斜利斯	土渤海	無	7.2	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
184	■■区川 No.98	斜利斯	土渤海	無	10.8	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
185	■■区川	斜利斯	土渤海	無	13.4	7.4	3.6	26.9	55.2	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
186	■■区川 No.50	斜利斯	土渤海	無	13.7	5.2	5.1	37.2	38.0	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
187	■■区川 No.98	斜利斯	土渤海	無	14.8	6	5.5	41.1	40.5	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
188	■■区川 No.53・70	斜利斯	黑色上層	渤海	14.6	6.3	4.4	43.8	61.7	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
189	■■区川 No.91・94	斜利斯	黑色上層	渤海	12.5	6.6	4.6	47.2	44.1	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
190	■■区川	斜利斯	黑色上層	渤海	13.5	6.4	5.3	39.3	47.4	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
191	■■区川 No.67	斜利斯	黑色土層	渤海	15.2	6.4	5.5	36.2	42.1	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
192	■■区川 No.94	斜利斯	黑色土層	渤海	12.5	4.8	3.8	30.4	38.4	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
193	■■区川 No.73	斜利斯	黑色土層	渤海	13.5	5.4	4.2	31.1	40.0	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
194	■■区川	14.7m	土渤海	渤海	14.4	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
195	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	11.8	5.2	3.5	29.7	44.1	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
196	■■区川 No.87	斜利斯	土渤海	渤海	12.4	5.4	3.9	31.5	43.5	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
197	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	14.5	10.6	3.3	22.8	72.1	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
198	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	13.8	7	2.6	18.8	56.7	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
199	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	—	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
200	■■区川 No.91	斜利斯	土渤海	渤海	16.4	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
201	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	18.6	8.9	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
202	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	8.2	5.4	5.6	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
203	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	11.2	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
204	■■区川 No.80	斜利斯	土渤海	渤海	11	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
205	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	4.2	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
206	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	21.2	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
207	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	22	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
208	■■区川	14.7m	土渤海	渤海	20	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
209	■■区川	斜利斯	土渤海	渤海	22.2	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
210	■■区川 No.3・55	斜利斯	土渤海	渤海	22	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
211	■■区川 No.94	斜利斯	土渤海	渤海	21.8	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
212	■■区川 No.25	斜利斯	土渤海	渤海	20.6	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
213	■■区川 No.28	斜利斯	土渤海	渤海	37.6	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
214	■■区川 No.94	斜利斯	土渤海	渤海	15.6	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
215	■■区川 No.28	斜利斯	土渤海	渤海	26.5	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
216	■■区川	11.1-12.7m	斜利斯	渤海	14.6	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
217	■■区川 No.85	斜利斯	渤海	渤海	12.6	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
218	■■区川 No.86	斜利斯	渤海	渤海	6.4	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
219	■■区川 No.88	斜利斯	渤海	渤海	9.4	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
220	■■区川 No.56	斜利斯	渤海	渤海	7	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
221	■■区川 No.94	斜利斯	渤海	渤海	12.2	7.5	3.1	25.4	31	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
222	■■区川 No.61	斜利斯	渤海	渤海	12.2	7.2	3	24.6	30.8	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
223	■■区川 No.42	斜利斯	渤海	渤海	12.4	8.2	2.5	25.8	31	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
224	■■区川 No.25	斜利斯	渤海	渤海	13.6	8.3	3.8	27.9	31	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
225	■■区川 No.15	斜利斯	渤海	渤海	13.2	9	4.3	32.6	31	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
226	■■区川 No.15	斜利斯	渤海	渤海	8	58.0	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
227	■■区川	渤海	渤海	渤海	15.4	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
228	■■区川	渤海	渤海	渤海	14.8	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明
229	■■区川	渤海	渤海	渤海	—	—	—	—	—	長・短・中・細	白・黑	不透明	透明	透明	透明

No.	出土地名等	種名	形状	口径	直徑	管径	深さ	底面形質	底面形質	面上	色調(外見)	色調(内面)	繊維・毛孔	肉眼～タコ足	左輪	右輪	底面	軸用
231	田ノ川 No.13	鉢形	有台輪	15.8	6.3	8.6	54.4	白	角錐状	灰	褐色灰	灰	木板～タコ足	左	B	11	36	
232	田ノ川	鉢形	有台輪	13.6	5.2	7.4		白	角錐状	灰	灰	灰	ヘラ型のクロマチ	右	B	11	18	
233	田ノ川 No.57・58	鉢形	有台輪	14.8				白	角錐状	灰	灰	灰		D	13			
234	田ノ川	鉢形	有台輪	12.6				自	角錐状	灰	灰	灰		D	4			
235	田ノ川	鉢形	有台輪	1.5				自	角錐状	灰	灰	灰			21			
236	田ノ川 No.56	鉢形	有台輪	8.8				自	角錐状	灰	灰	灰		D	10			
237	田ノ川	鉢形	有台輪	7				自	角錐状	灰	灰	灰		D	36			
238	田ノ川	1.2 噴	有台輪	7.6				自	角錐状	灰	灰	灰		D	36			
239	田ノ川	鉢形	有台輪	8.2				自	角錐状	灰	灰	灰		D	22			
240	田ノ川	鉢形	有台輪	大變				白	角錐状	灰	灰	灰						
241	田ノ川	鉢形	有台輪	大變				白	角錐状	灰	灰	灰						

木製品

No.	出土地名等	部位	輪幅	良	中	差	差	差	差	差	差	差	差	差	差	差	差	差
242	田ノ川	丸木手	丸木手	95	4.3													
243	田ノ川	馬形	馬形	22	3.4	0.6												
244	田ノ川	馬形	馬形	13.8	9.8	1												
245	田ノ川	馬形	馬形	17.6	13	1.4												
246	田ノ川	馬形	馬形	20	7	0.6												
247	田ノ川	馬形	馬形	20.6	6.6	0.6												
		L字木	L字木	16.2	6.6	0.8												

図 版

(凡例) 土器表面のスクリーントーン表示は以下の状態を表す。



黒色処理



赤 彩



漆 塗



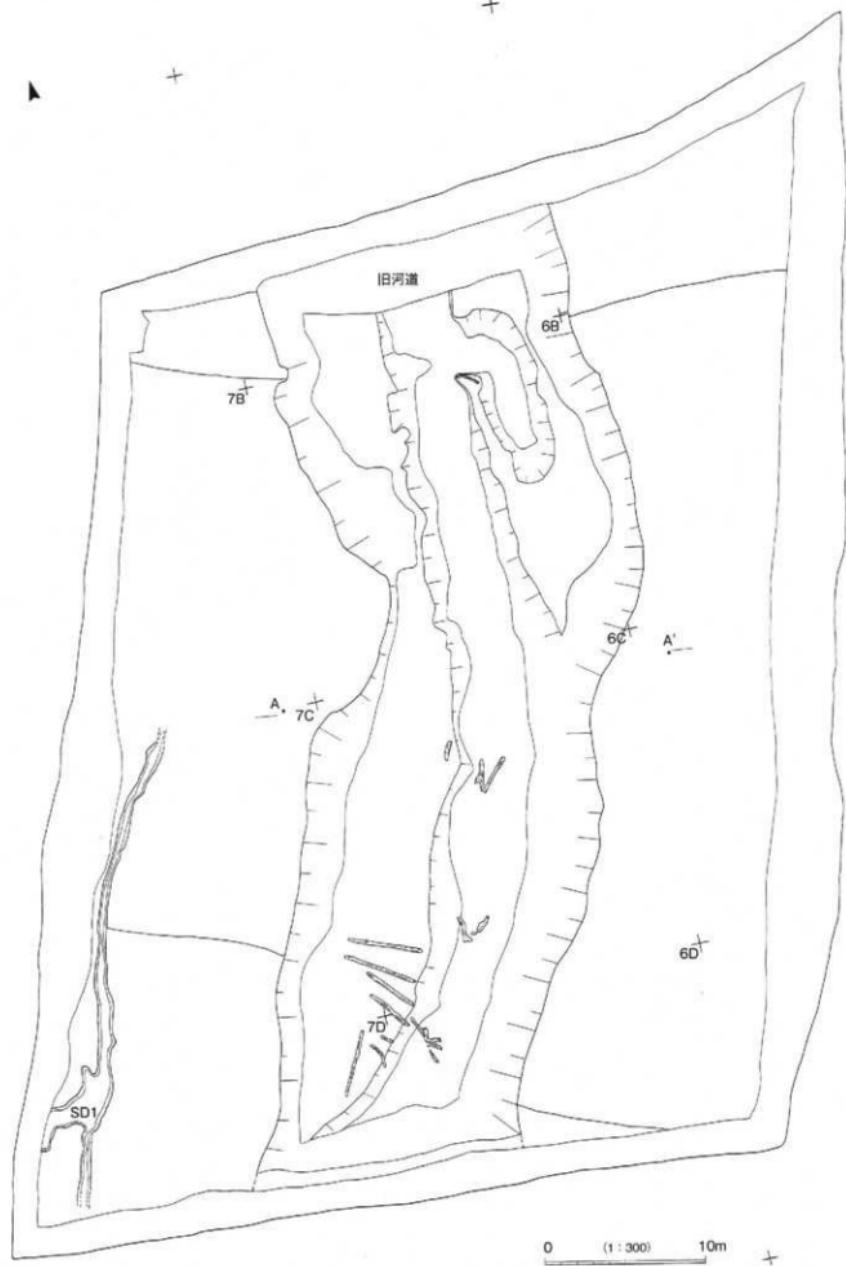
スス・タール

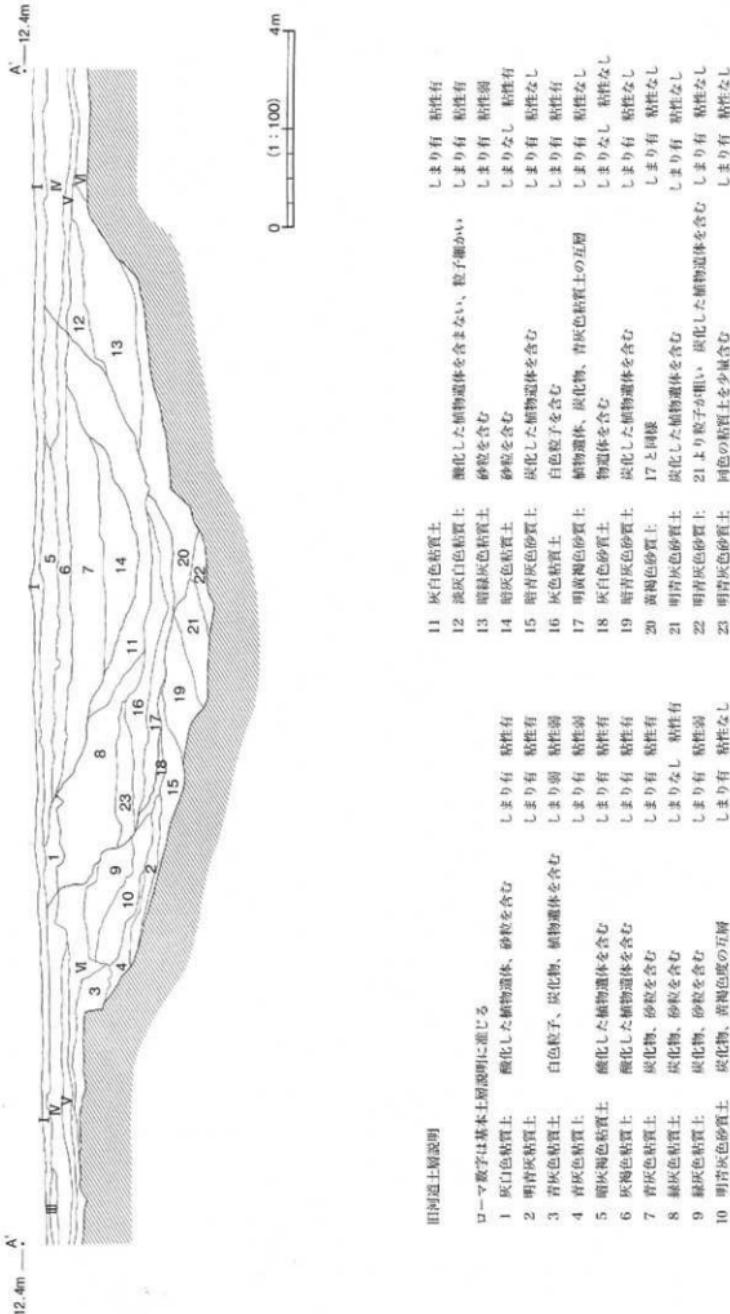
調査位置図

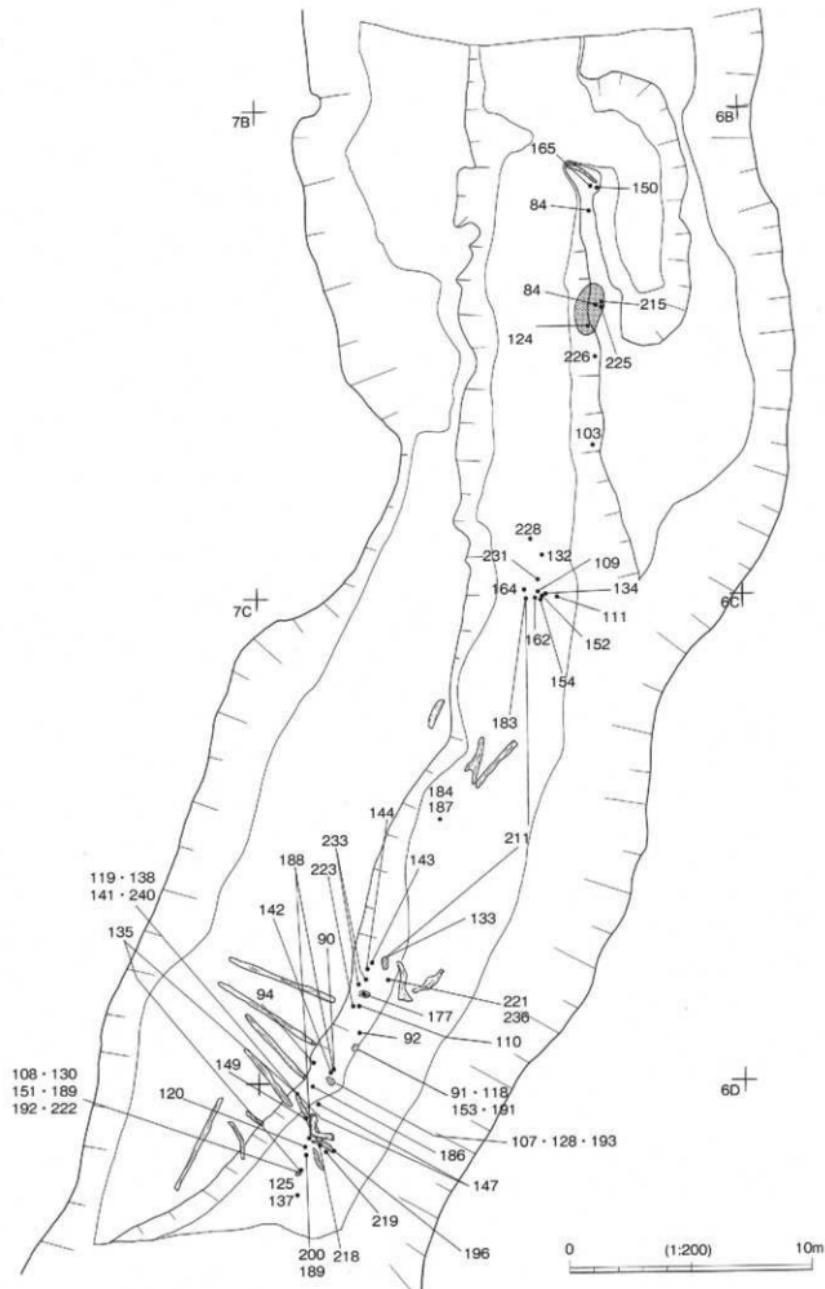
図版 1

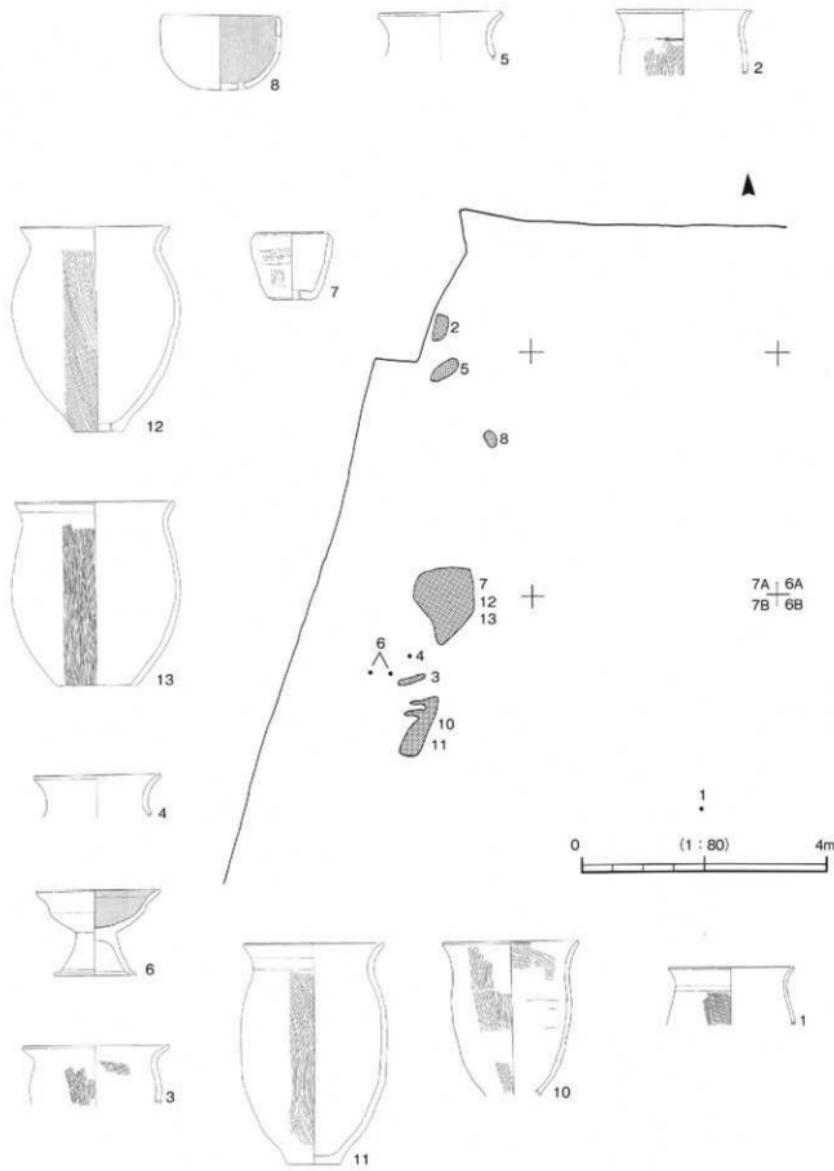


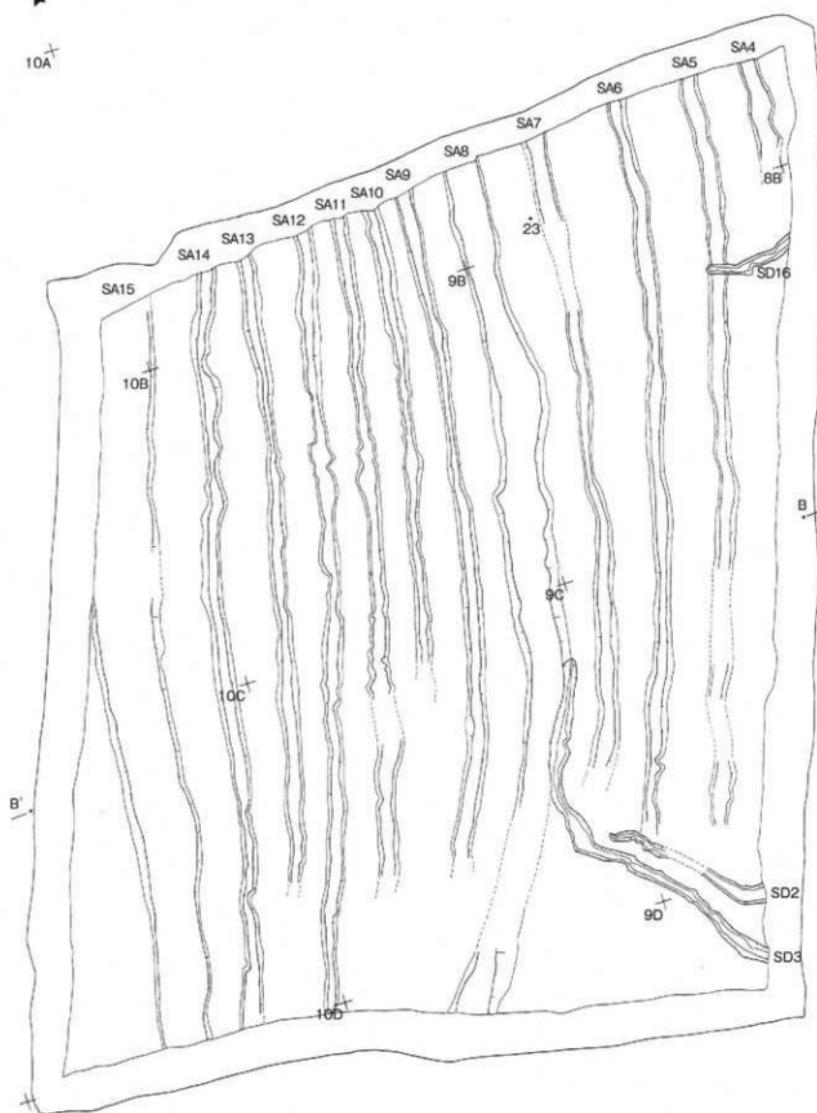


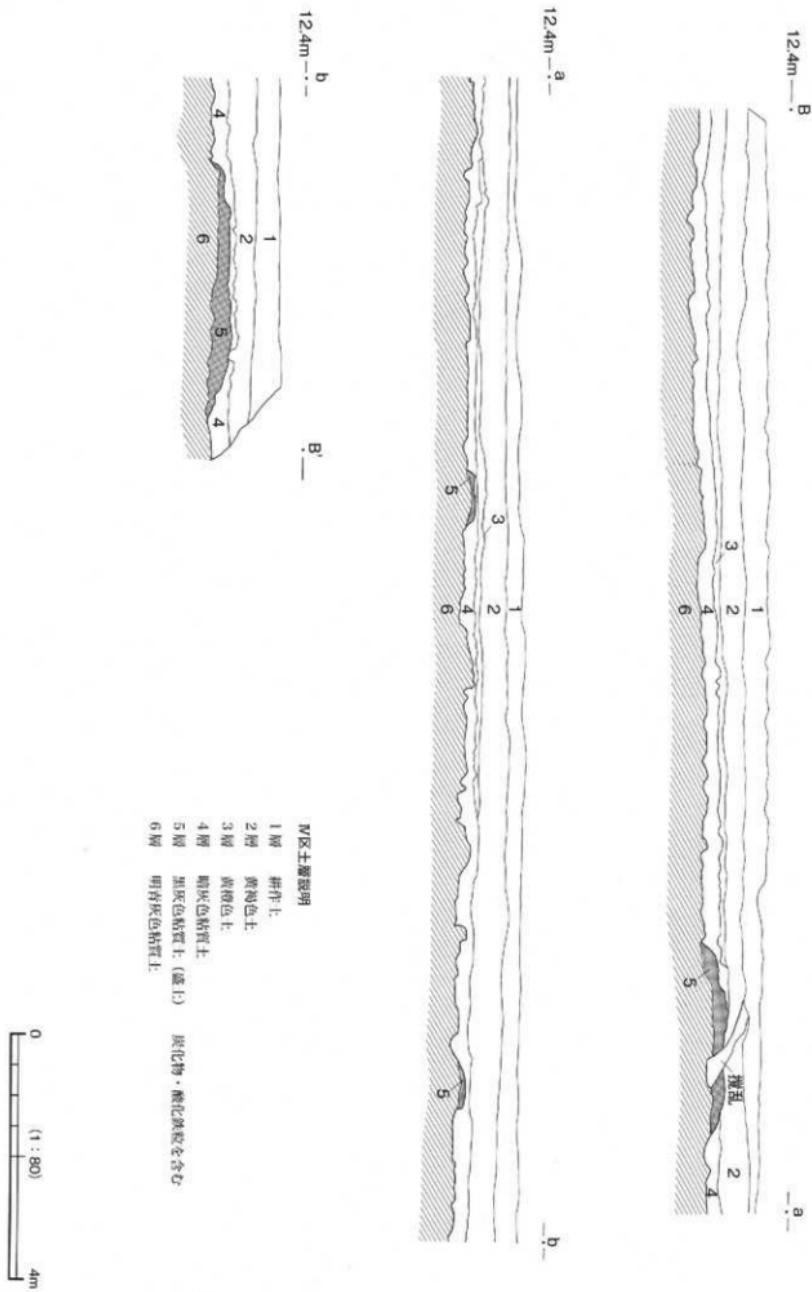






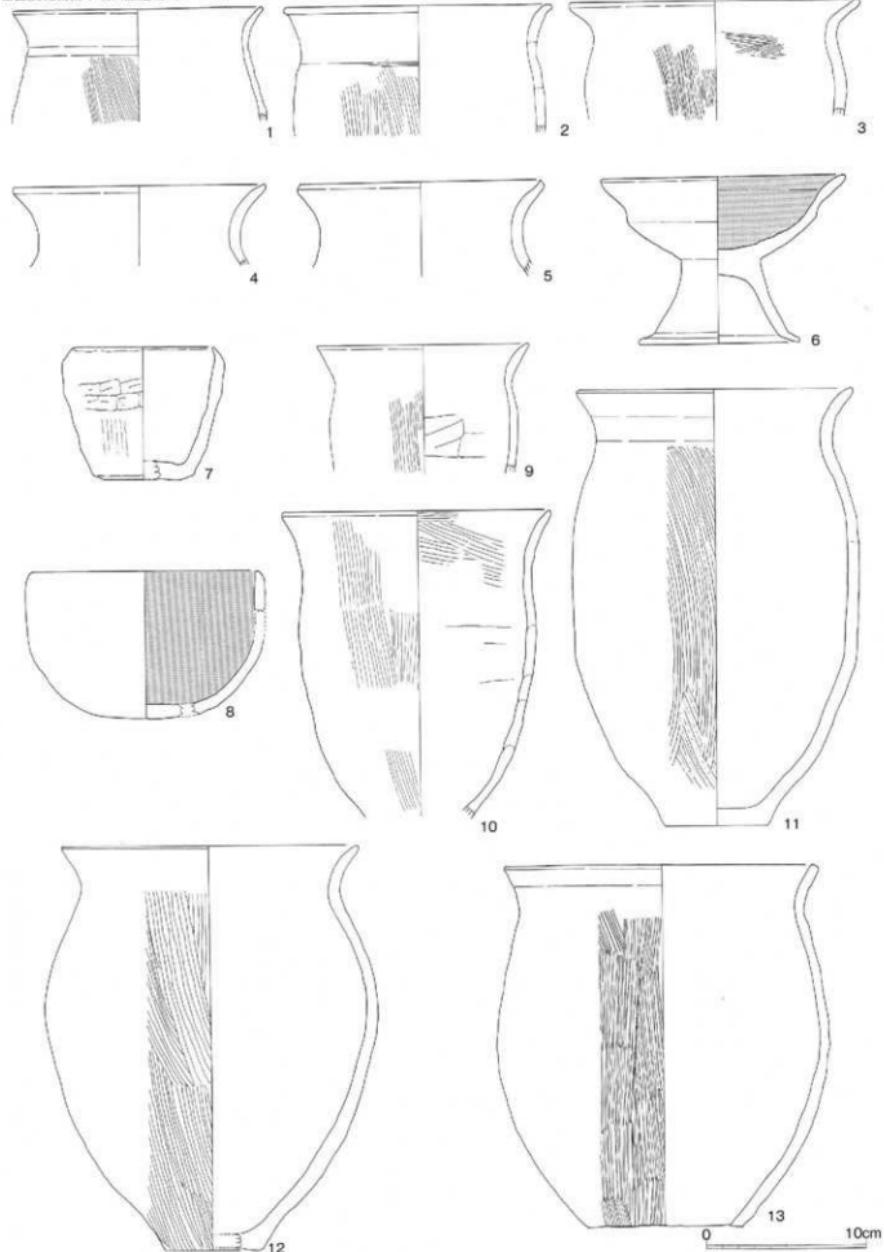






Ⅲ区炭化物集中域出土遺物

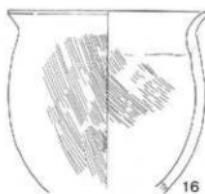
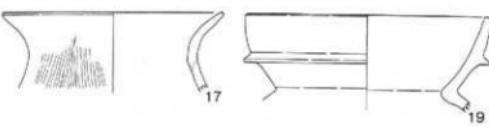
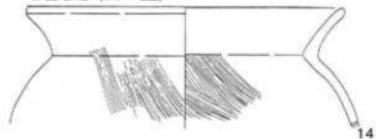
Ⅲ区炭化物集中域出土遺物 (1 ~ 13)



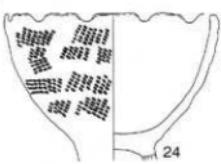
図版 10

IV区 SA8 : 6A III区旧河道出土遺物 (1)

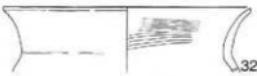
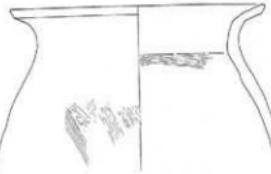
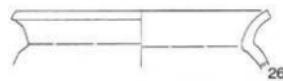
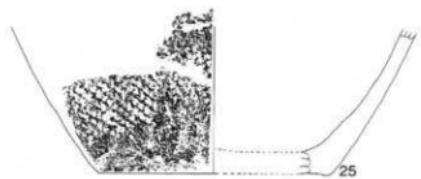
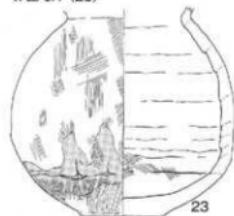
IV区 SA8 (14 ~ 22)



III区旧河道 (24 ~ 32)

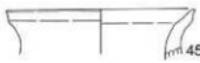
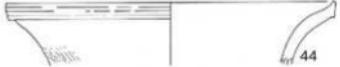
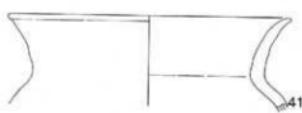
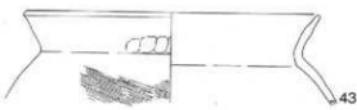
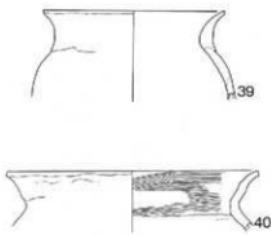
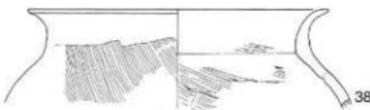
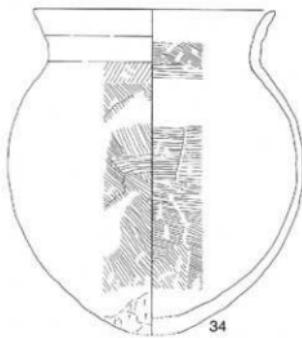
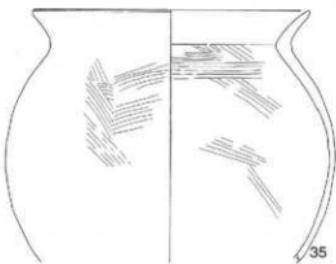
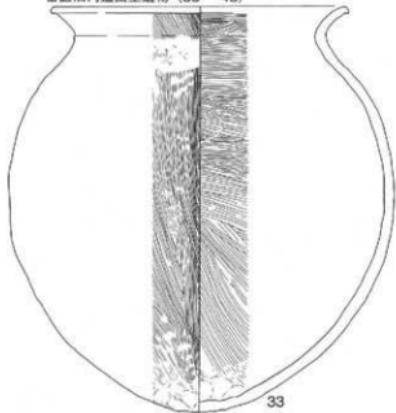


IV区 6A (23)



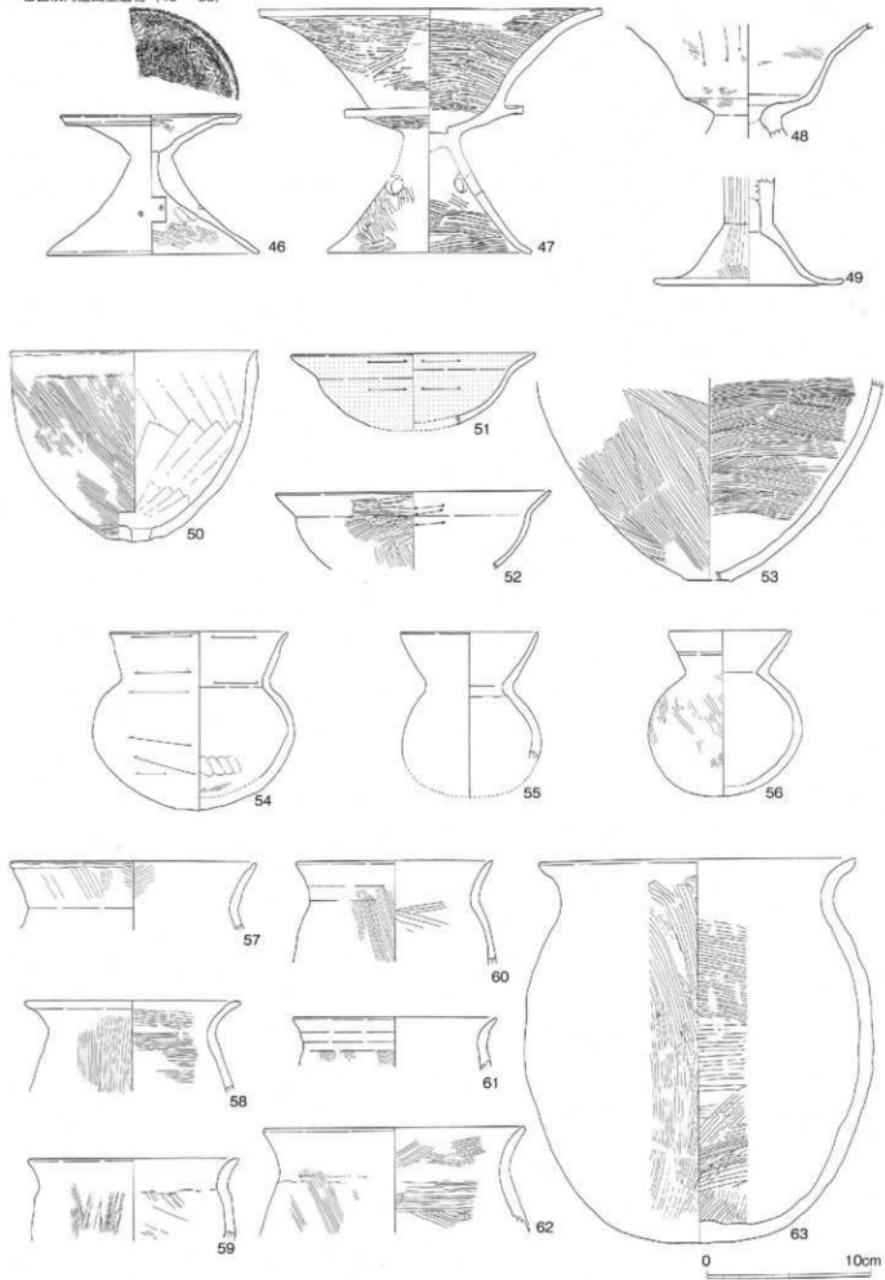
0 10cm

III区旧河道出土遺物 (33 ~ 45)

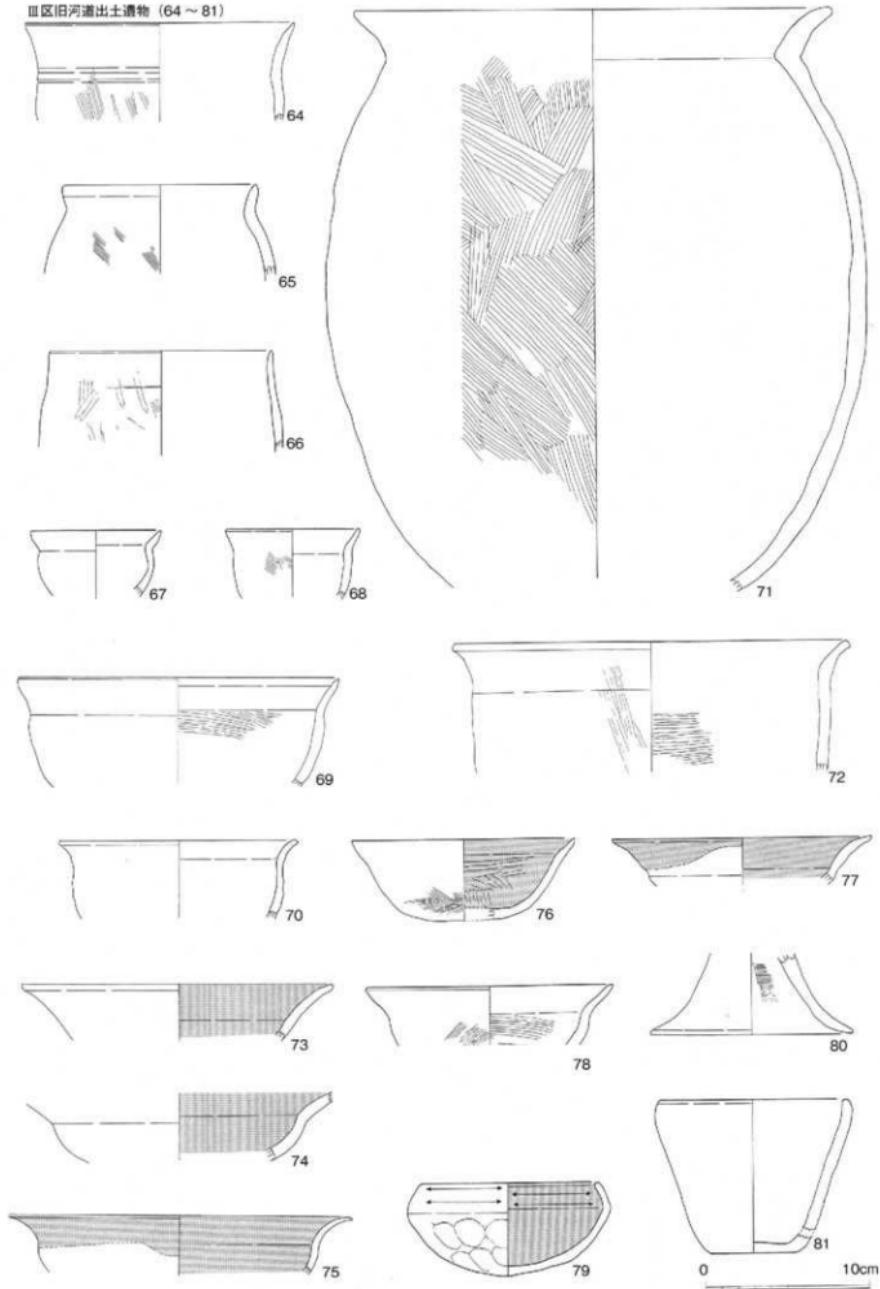


0 10cm

III区旧河道出土遗物 (46 ~ 63)

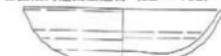


III区旧河道出土遺物 (64 ~ 81)



图版 14

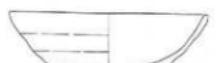
III区旧河道出土遗物 (82 ~ 102)



82



89



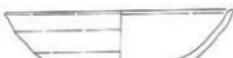
96



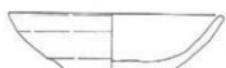
83



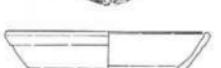
90



97



84



91



98



85



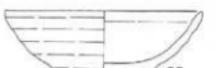
92



99



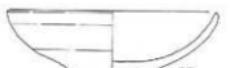
86



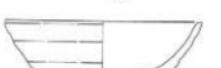
93



100



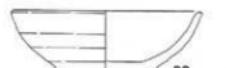
87



94



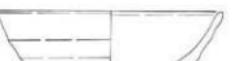
101



88



95



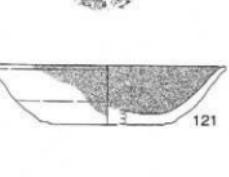
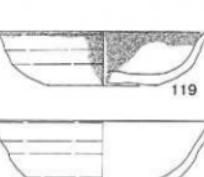
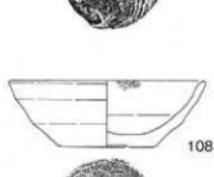
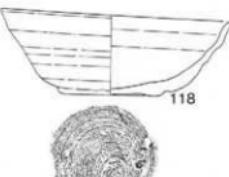
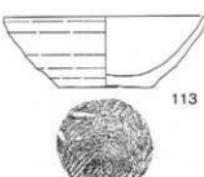
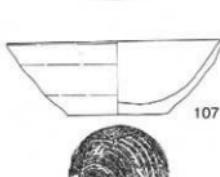
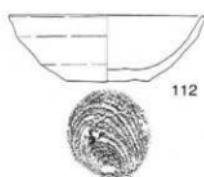
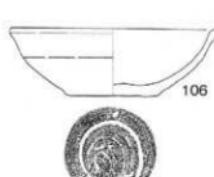
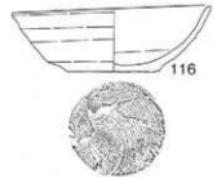
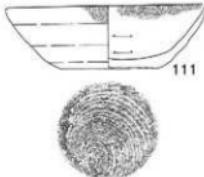
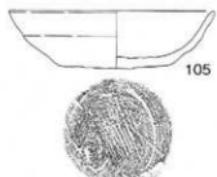
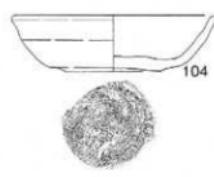
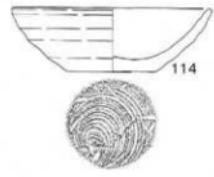
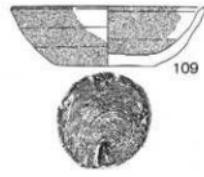
102

土器器無台椀 A 類 (82 ~ 102)

III区旧河道出土遗物 (5)

0 10cm

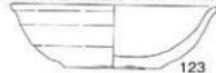
III区旧河道出土遺物 (103 ~ 122)



0 10cm

土師器無台椀 B類 (103 ~ 118)・C類 (119 ~ 122)

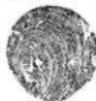
Ⅲ区旧河道出土遺物 (123~142)



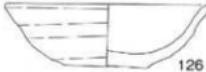
123



124



125



126



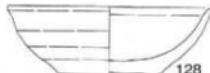
127



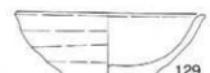
136



137



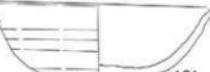
128



129



130



131



138



139



132



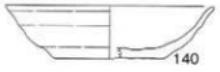
133



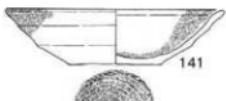
134



135



140



141



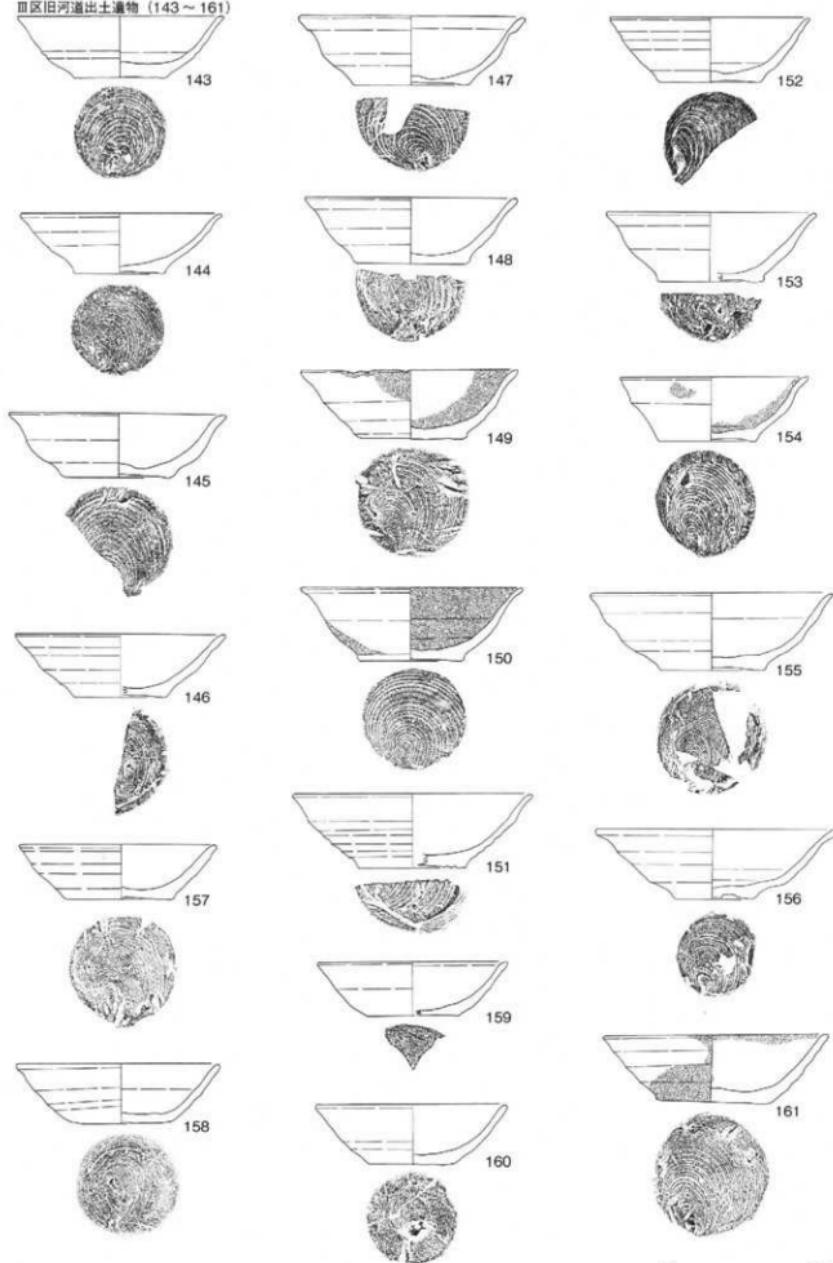
142



0 10cm

土師器無台椎 D 類 (123~135)・E 類 (136~142)

Ⅲ区旧河道出土遺物 (143 ~ 161)



土師器無台椀 E類 (143 ~ 156)・F類 (157 ~ 161)

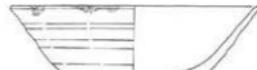
0 10cm

圖版 18

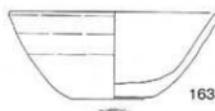
III區旧河道出土遺物 (162 ~ 181)



162



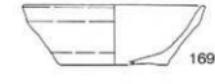
164



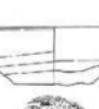
163



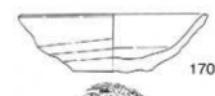
165



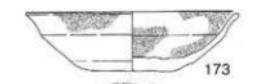
169



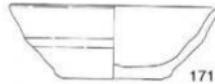
172



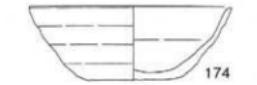
170



173



171



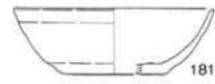
174



178



179



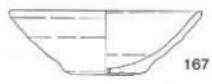
181

土師器無台縫 F 類 (162 ~ 166)

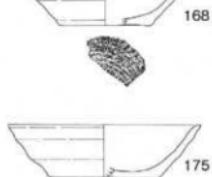
III區旧河道出土遺物 (9)



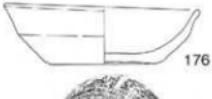
166



167



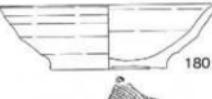
175



176



177



180



0 10cm

Ⅲ区旧河道出土遺物 (10)

図版 19

Ⅲ区旧河道出土遺物 (182 ~ 205)



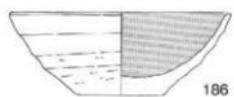
182



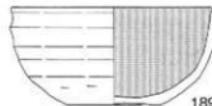
183



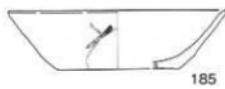
184



186



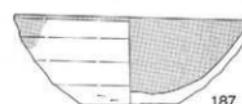
189



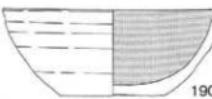
185



192



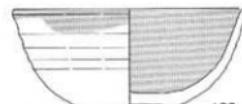
187



190



193



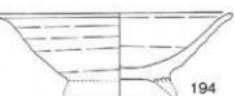
188



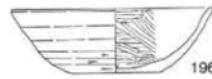
191



194



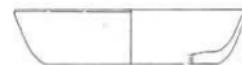
195



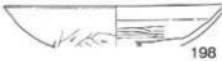
196



199



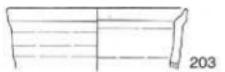
197



198



200



203



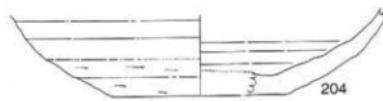
201



202



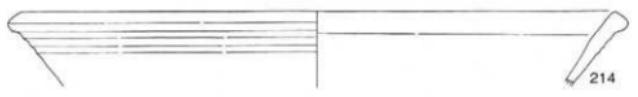
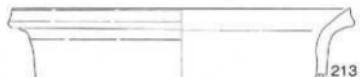
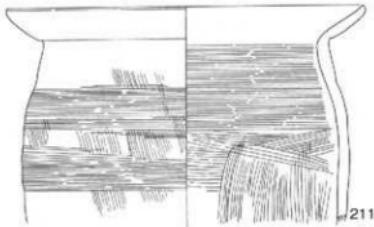
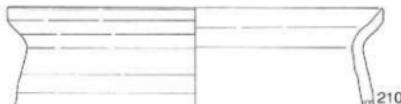
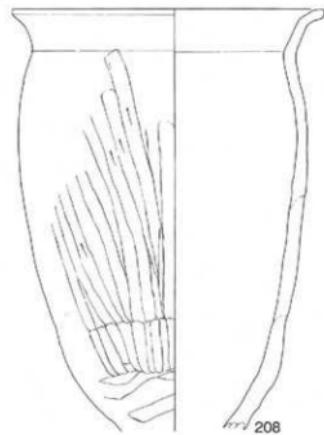
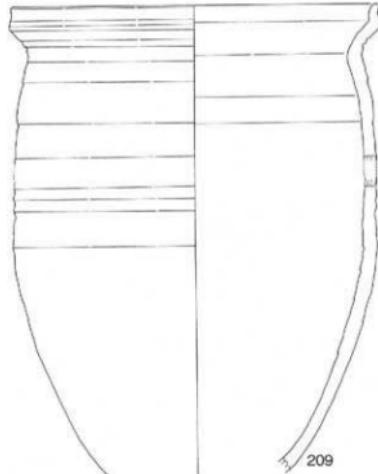
204



204

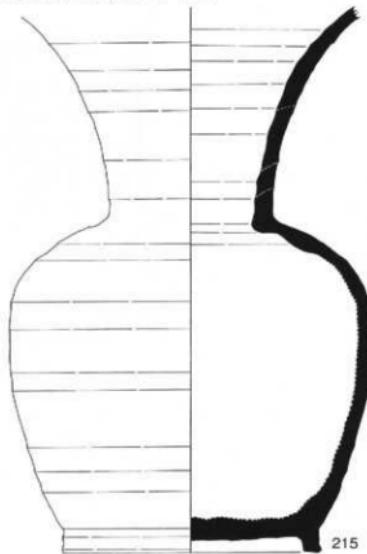
0 10cm

III區舊河道出土遺物 (206 ~ 214)

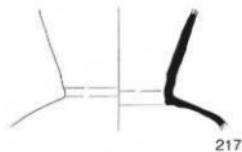


0 10cm

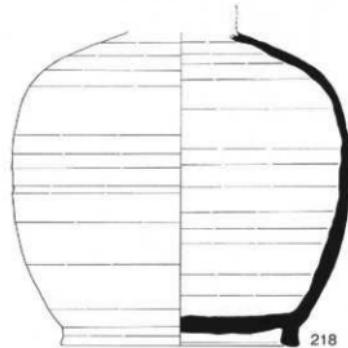
II区旧河道出土遺物 (215 ~ 221)



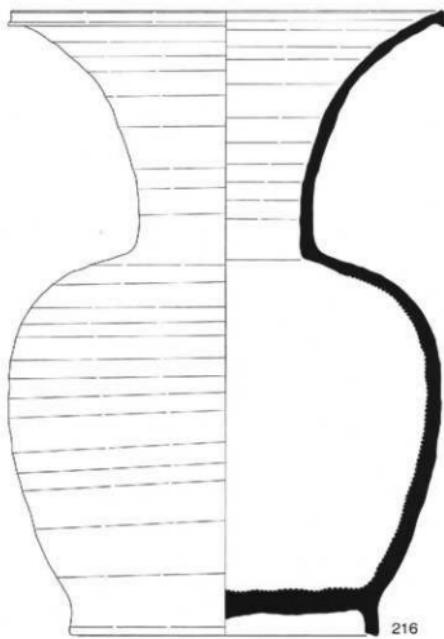
215



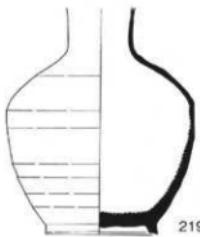
217



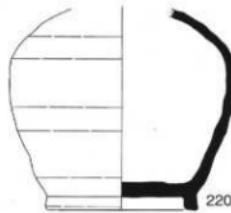
218



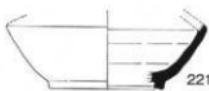
216



219



220

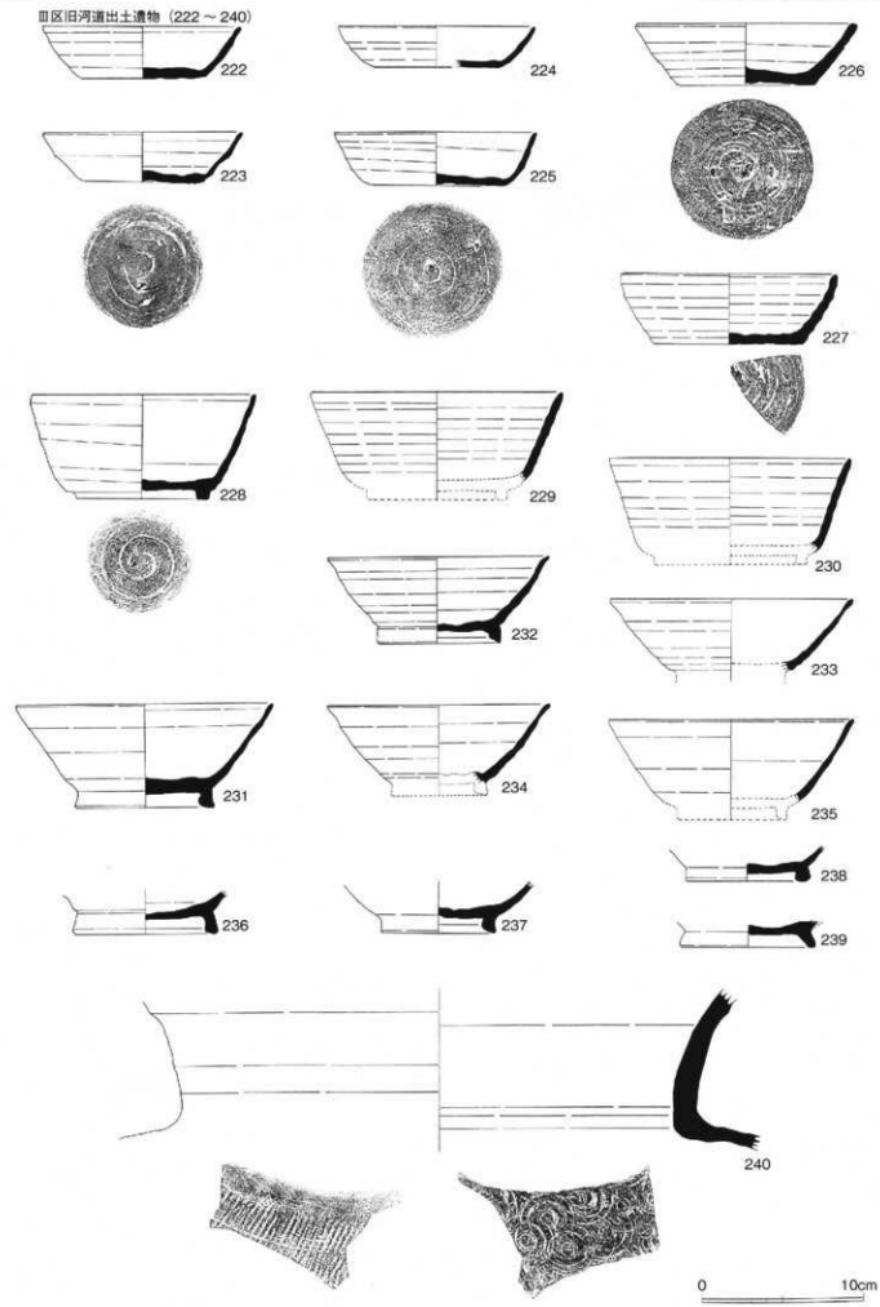


221

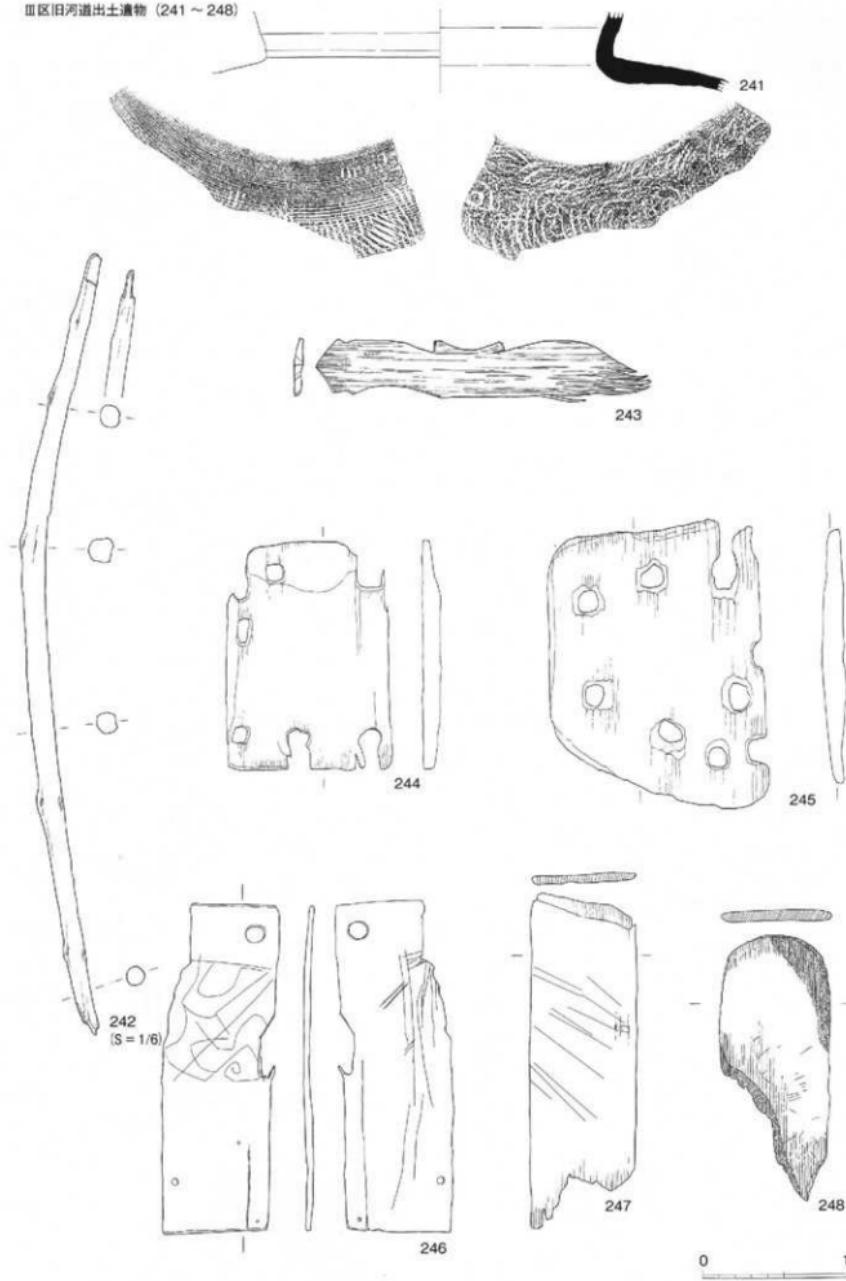
0 10cm

図版 22

III区旧河道出土遺物 (13)



Ⅲ区旧河道出土遺物 (241 ~ 248)



0 10cm





III区 旧河道発掘状況



IV区 畦状遺構



II区 完掘状況（南から）



II区 北側土層断面



III区 旧河道掘削作業



II区 旧河道遺物出土状況



III区 SD1



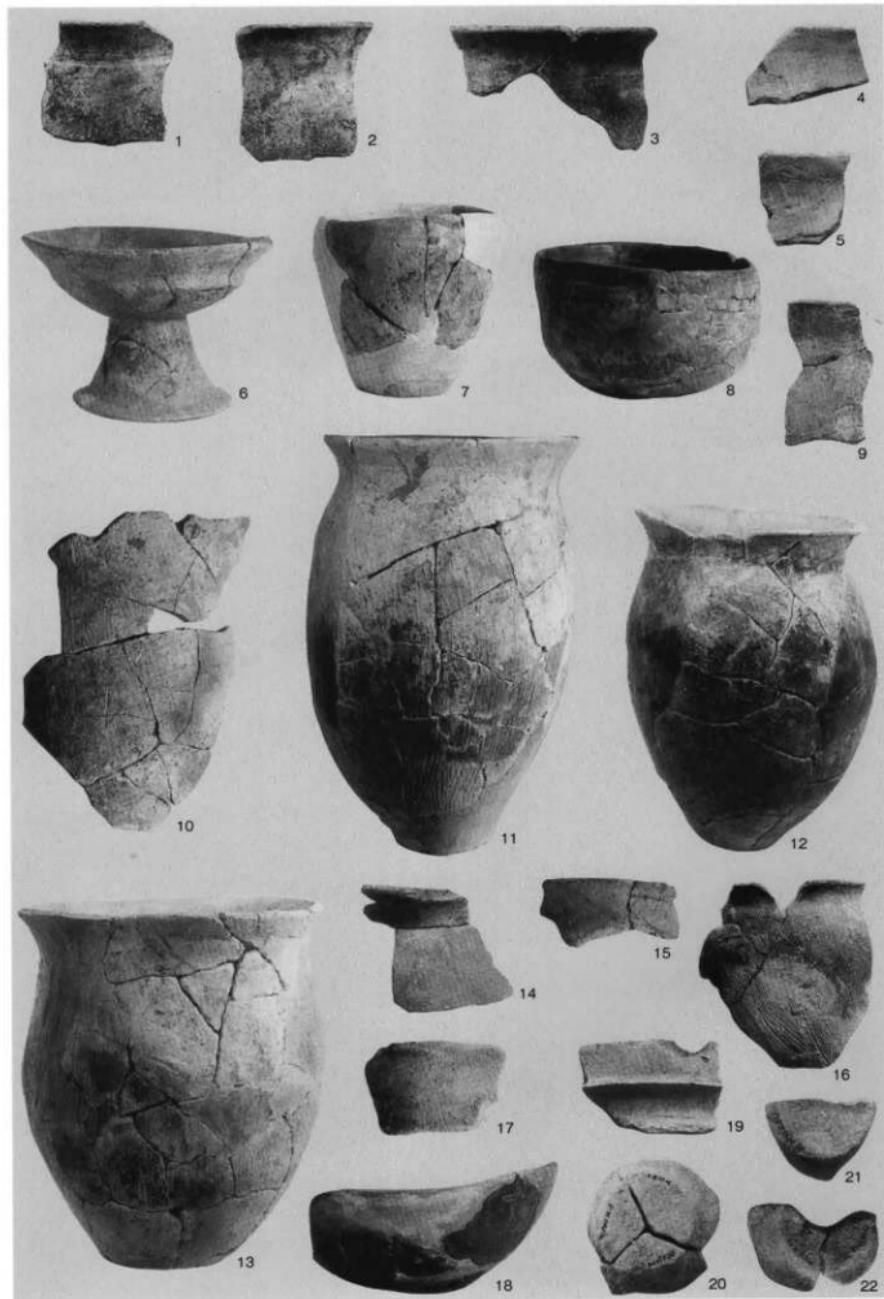
III区 旧河道中央土層断面

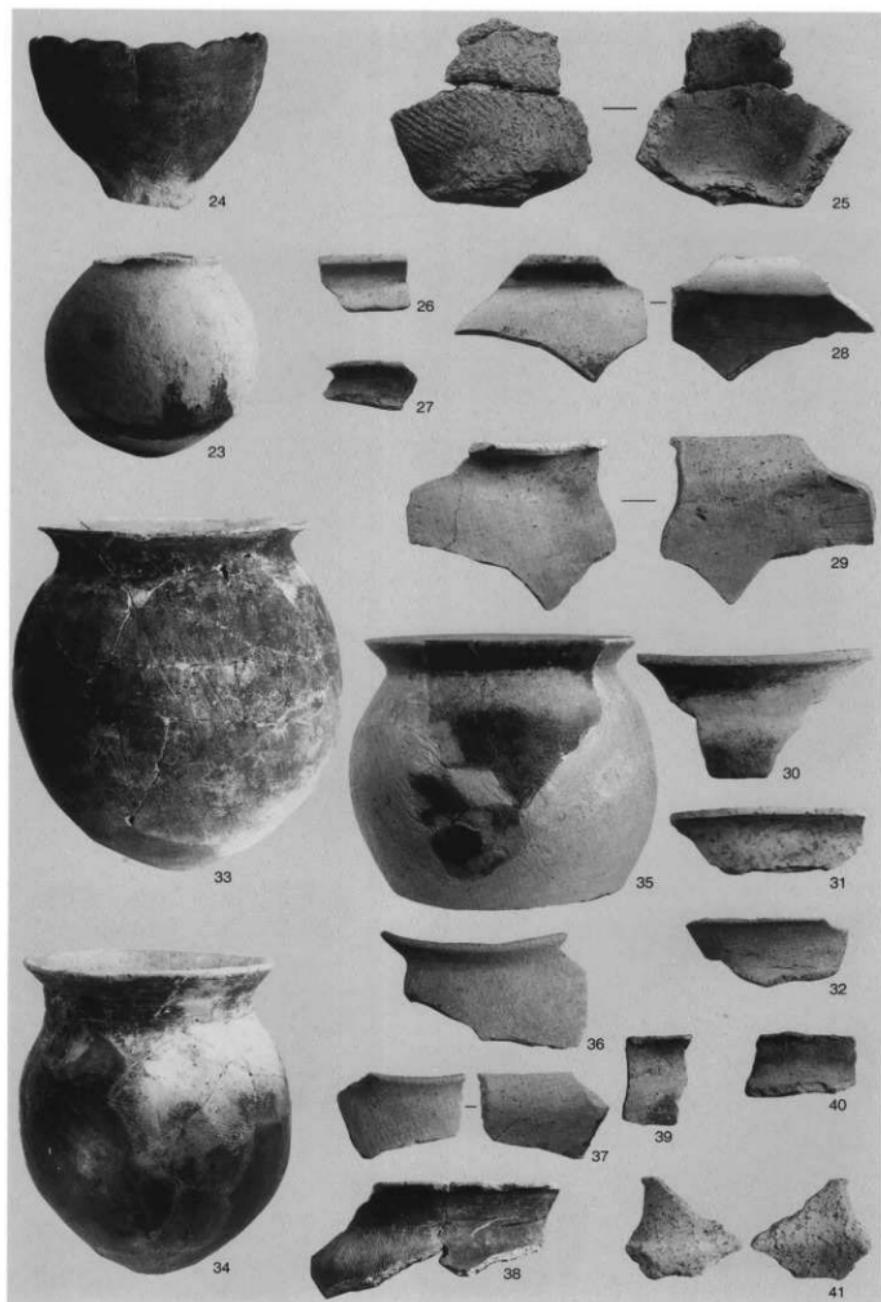


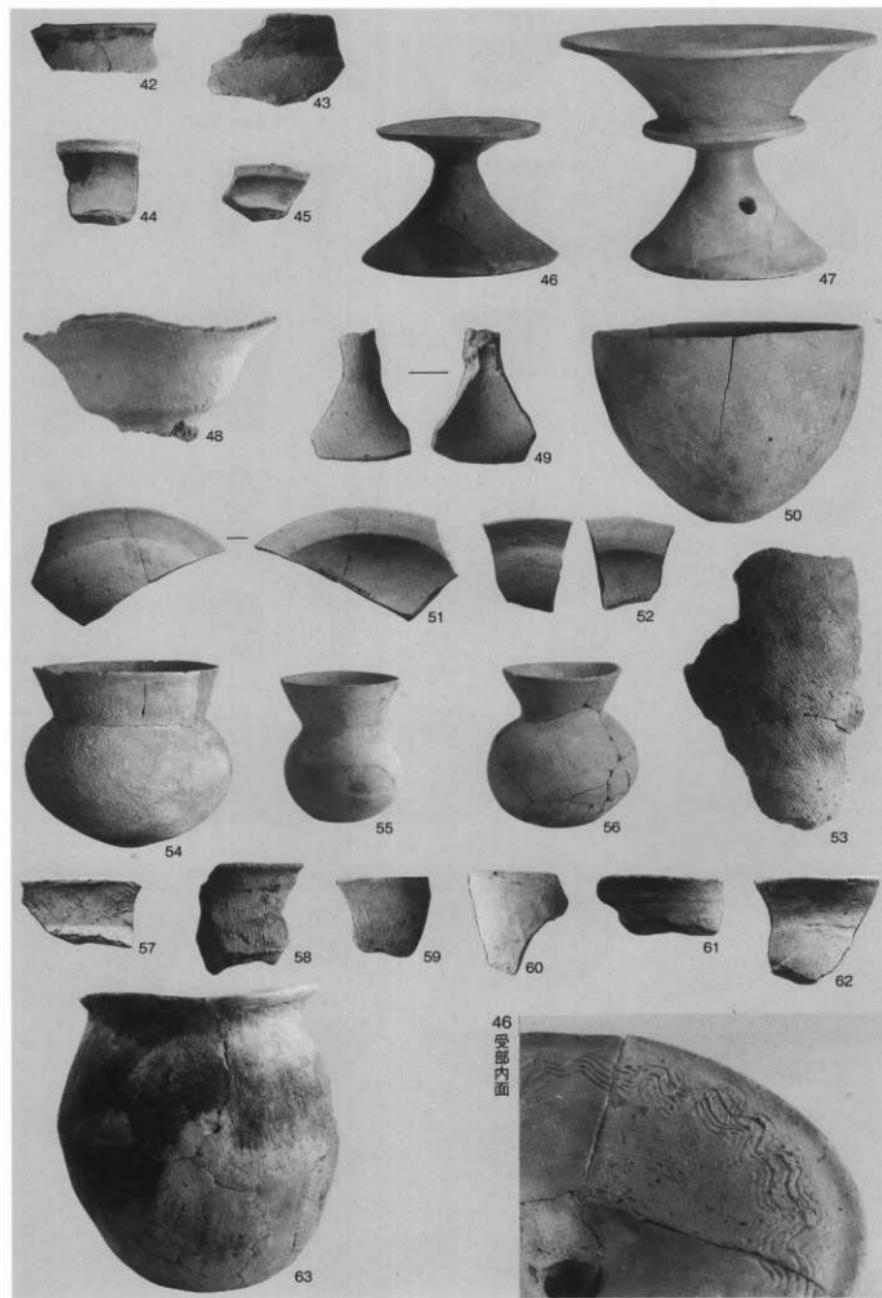
IV区 貝状遺構完掘状況（東から）

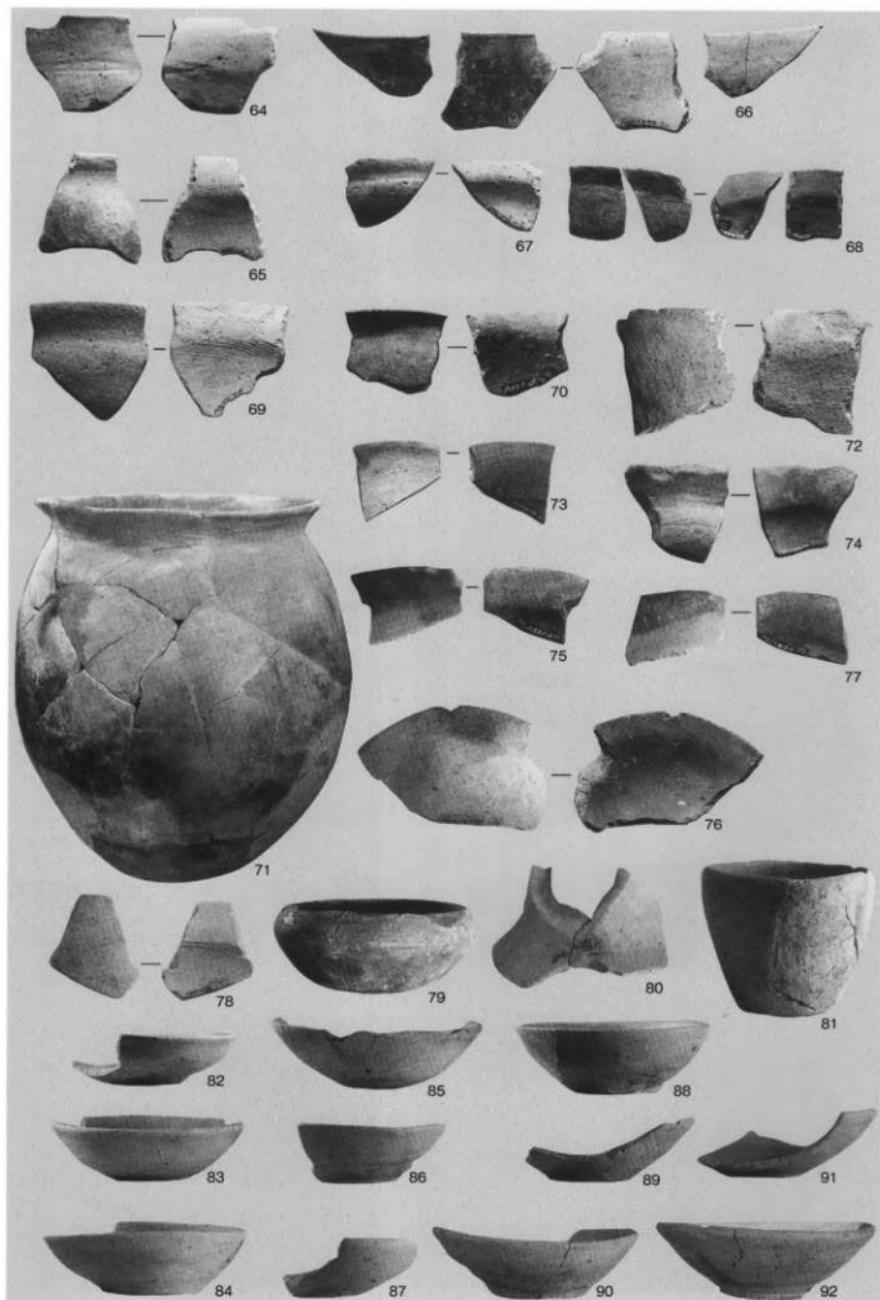


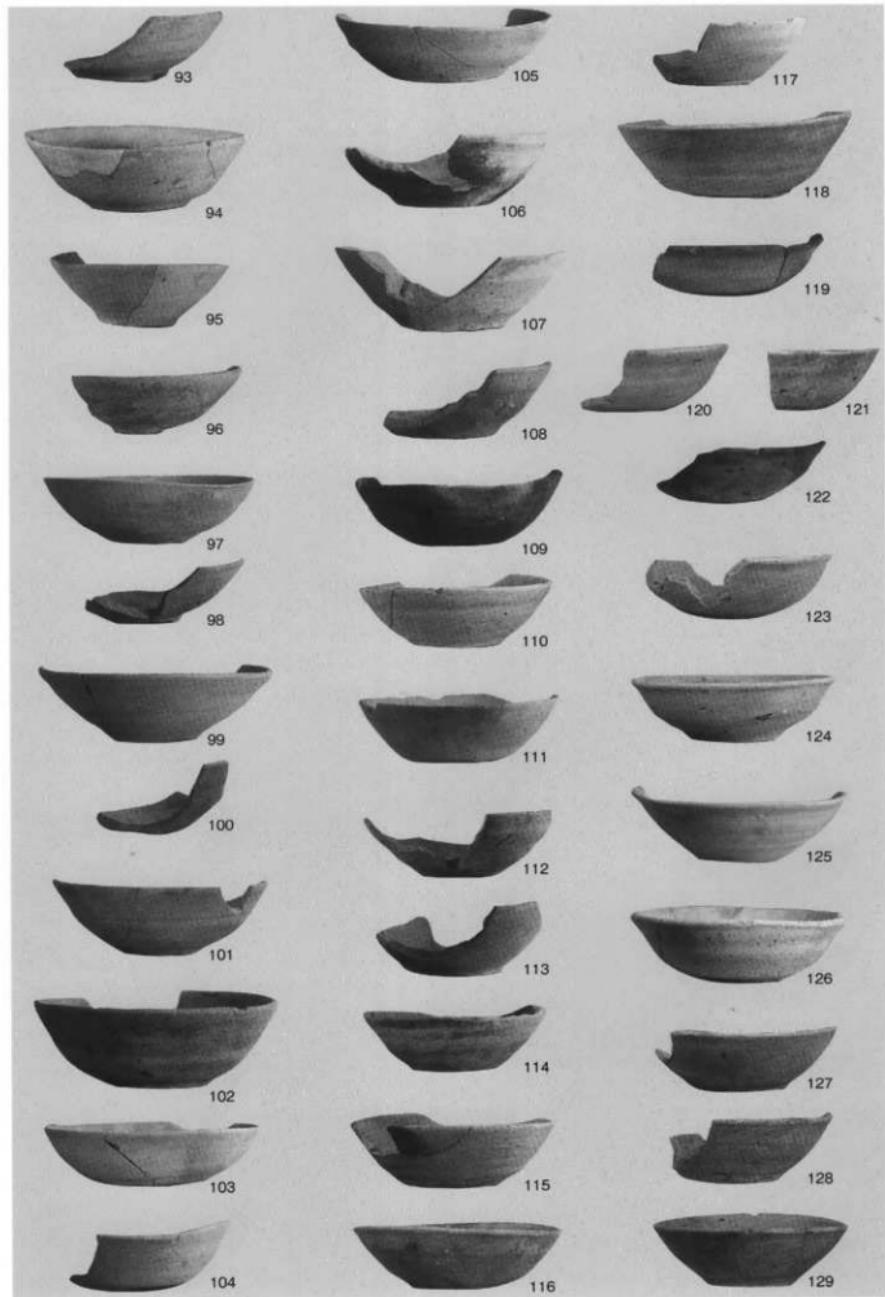
IV区 道路状遺構1（南から）

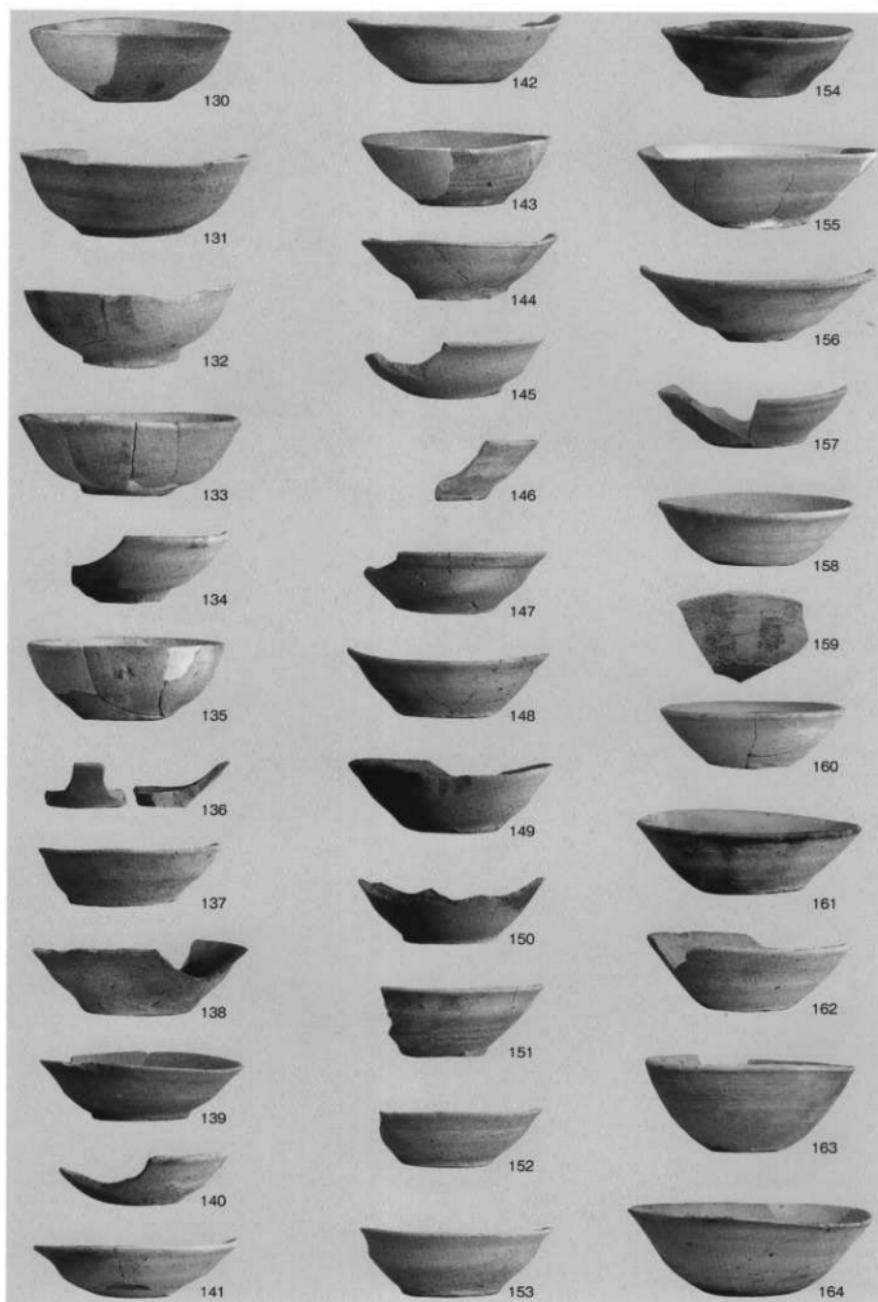


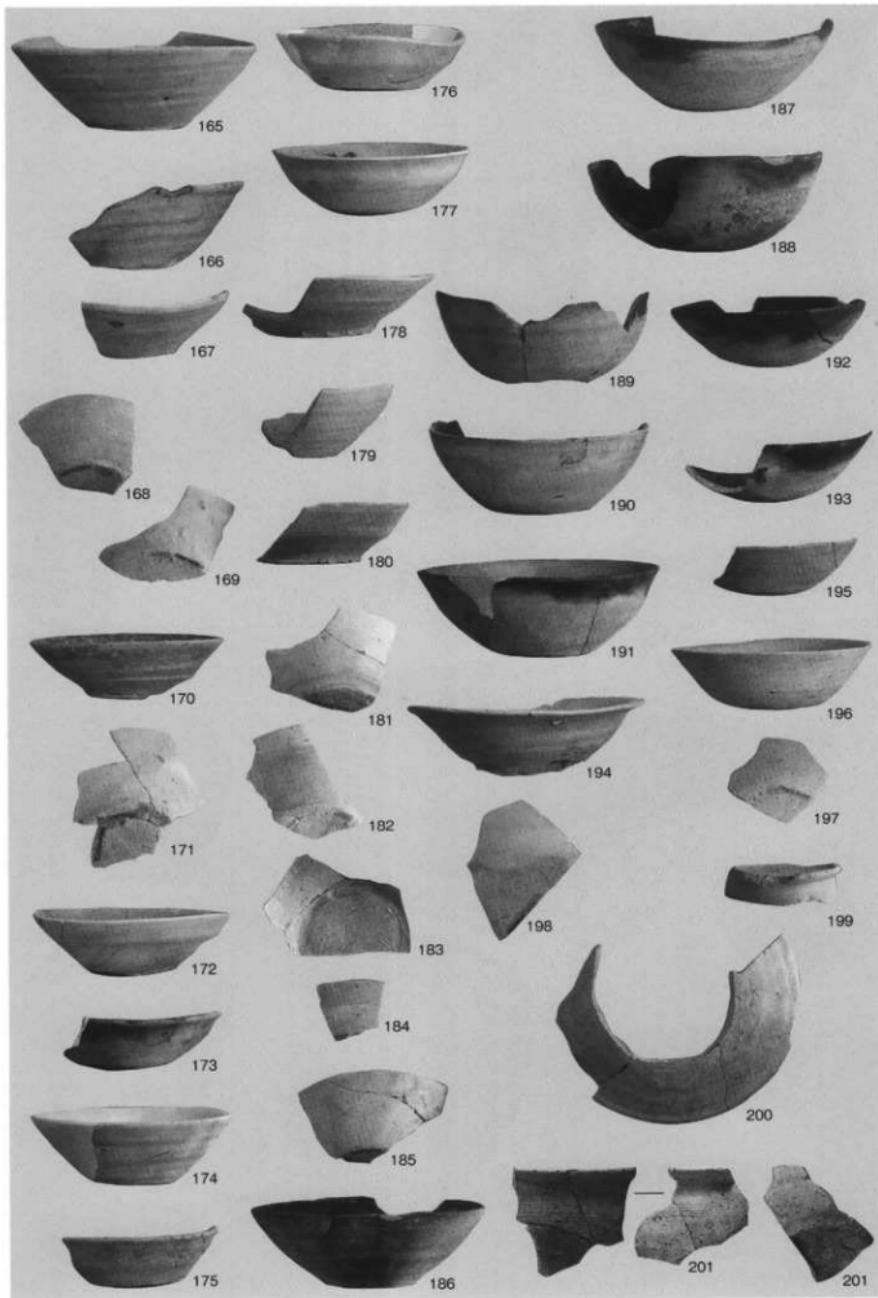


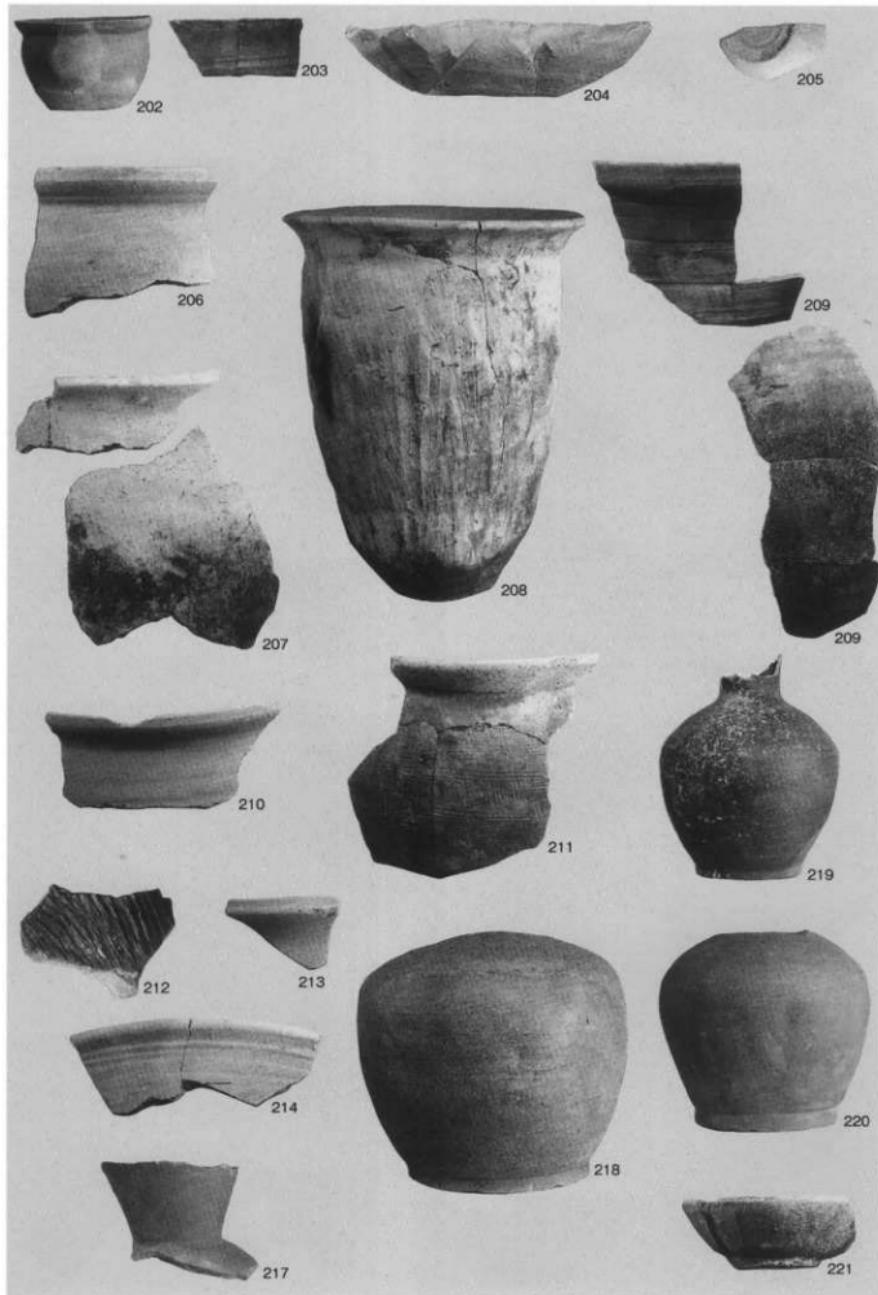


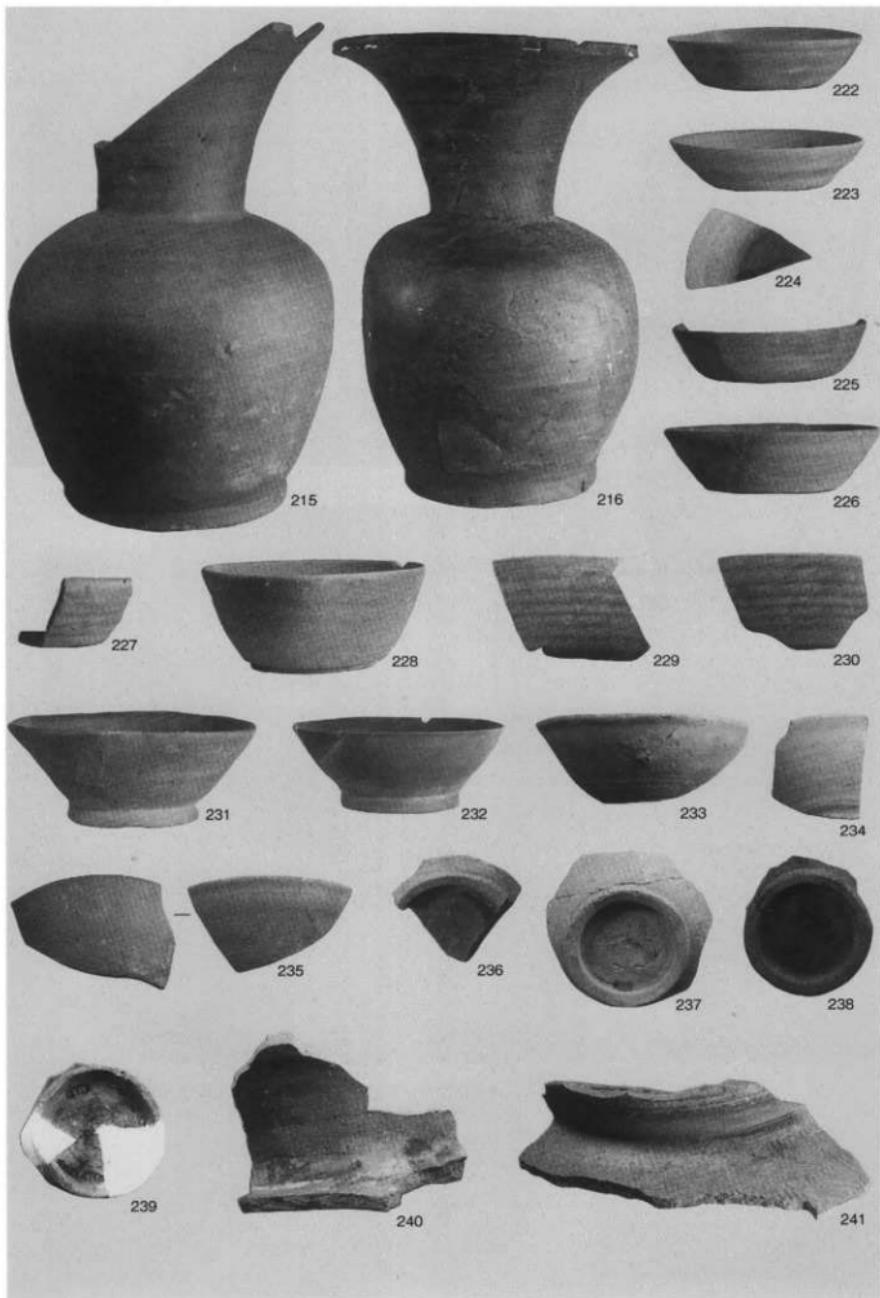


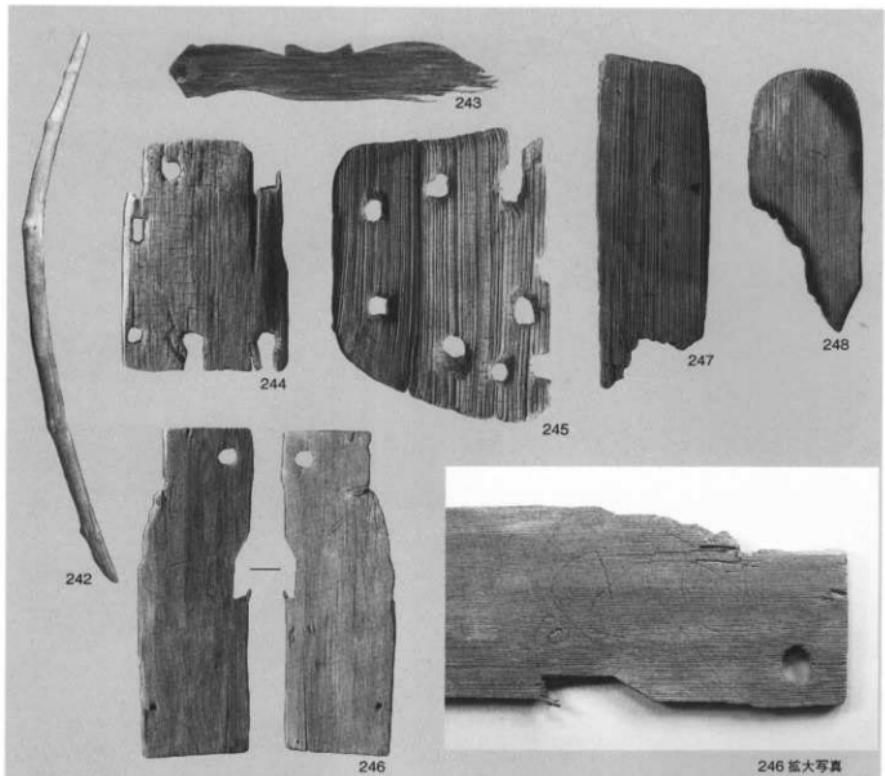






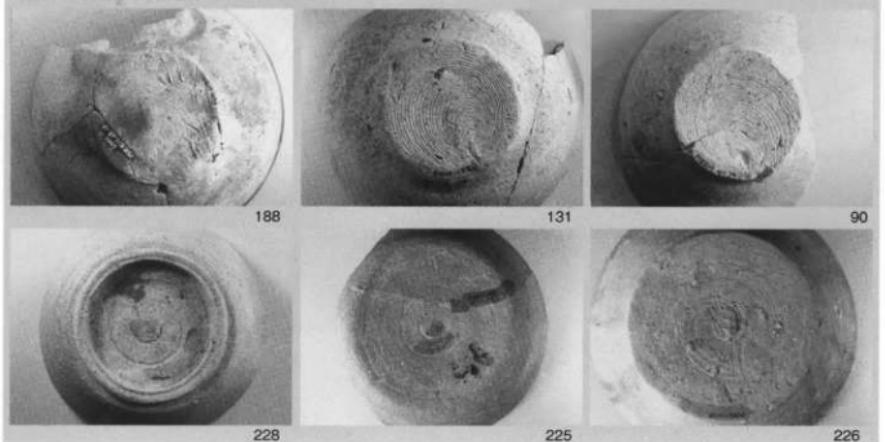






246 拡大写真

底部切り離し技法と回転方向



報告書抄録

ふりがな	かどしんいせき やちちく II							
書名	門新遺跡 谷地地区II							
シリーズ名	和島村埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編著者名	丸山一昭							
編集機関	和島村教育委員会							
所在地	〒949-4511 新潟県三島郡和島村小島谷3422番地 TEL0258-74-3111							
発行年月日	2005年11月22日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
門新遺跡	新潟県三島郡和島村大字上御谷地	1504041	189	37度 35分 30秒	138度 47分 23秒	和島村教育委員会	約12,000m ²	道路建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			備考		
遺物包含地	縄文 古墳 平安	旧河道 水田跡	縄文土器・古墳時代(古式土師器)・土師器 ・須恵器・黑色土器・木製品					

和島村埋蔵文化財調査報告書第17集
－国道116号線和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－
門新遺跡 谷地地区II

平成17年11月22日発行 編集・刊行 新潟県和島村教育委員会
 〒949-4511 和島村大字小島谷3434番地4
 電話 0258-74-3111 (代)
 FAX 0258-74-3500
 印刷・販本 桑原第一印刷所
 新潟市和合町2丁目4番18号
 電話 025-285-7161